

# 俗語考 上

## 橘守部撰

### あノ部

○あゝ はれマア やれ～マア 此あハう  
れじきにつき、悲しきにつき、おもしろきにつき、其事の甚切なるときむねより溢れ出る聲なり。故是を歎息音と云。此歎息を歌に「あはれ」とのみよみ來つれば、俗に「あゝ」と云は、亞々の音かとおもふやうなれど、既に古事記中卷神武段に「阿々志夜胡志夜笑マナリ」此者嘲咲者也」とあり。かゝれば「あゝ」と云も古き時よりの言なりけり。かくて「あはれ」と云は、此「あゝ」の歎息と、「はれマア」と歎く言と、一つを重て一つとなれりし也。此東國にては「やれ～マア」と云て、「はれ」といふ言は、をさへ聞えざりけれど、國によりては、今も「あゝはれマア」とうち長息こと有。又今俗に物の危き時などには「えゝ」と惜むことあり。是も同行の通音也。又應聲にも「えゝ」と答ふ。源氏若菜上に「もう～にみゝもおぼ／＼しかりければ、あゝとかたぶき居たり」とある。

○あいきやう 源氏帝木に「ほうけづきて、くすしくあいきやうなからん」落窪之一之上「いとあいきやうなからけるいももたりけるものかなとて、はらだちかなぐりておくれば、たちはきわらふ云々」孝經「愛敬盡於事親」文選曲水詩序 王元長「愛敬盡於一人」光耀究四海「呂覽」愛敬盡於事親。光耀究於百姓究於四海「此天子之孝也」

○あいきやうこぼる 源氏顔貌「御さしぬきのそそまでもなまめかし。あいきようのこぼれおづるぞ。あやにくなる見なしなるべき」

○あいさつ

「あしらふ」を見よ。

○あいさふ

「あしらふ」を見よ。

○あかがり 脾也。万葉十四「いねつけばかゝる  
あか手をこよひもか殿のわく子がとりてなげかん」

神樂早歌「あかいりふむなしりなる子われもめはありさきなる子」太秦牛祭々文に「冬仁向戸留大脳」

など見ゆ。赤脳の約れる言也。

○あがく もがく

氣をいらちて物にさわぎ

あせる人を、あがくといふ。古事記高津宮段に「足母

阿賀迦邇姫云々空穗國譲に「おばす事たひら

かにと手をあがき祈り願立させ給ふ」とあり。こは

もと馬の蹠より出たる歟。字鏡に「蹠也。蹠也。

馬奔走貌。阿加久」また「蹠阿加久」などありて、萬

葉にも馬に多くよめり。但し心いられのせらるゝ時

は、おのづから足ぶみせられて、じだんだふむと云

状なれば、馬にも限らざるなり。もがくとも云に合

せて知べし。もがくは身をあがくなり。

○あかご あかんばう 赤子也。狹衣一八に

「あかごのむつきにつゝまれたるこゝちして」續世繼

みそぎの「あかごにおはしましけるとき」和名抄に「赤

子知子。今按云。含乳之義也」とあり。古く此赤子

をみどりごと云しは、草木の新綠に比して、壽たる

言なるべし。和名抄にも「嬰兒一云孩兒」を美止利

古と訓たり。江戸の方言にあかんばうと云は、赤坊

の意にて、坊と云稱僧に轉じ、僧より小兒に轉じて、

後の俚言也。

○あかづく 堀附也。萬葉集十九丁「白たへ衣堀

づくまでに十五丁「妹が衣の堀づく見れば二十三丁

東歌「させし衣にあかづきにかり」

○あかのみづ 世のもの知人の、閼伽は水の梵

語なれば、阿加の水とては重言也といへるは、かへ

りてひが事也。閼伽は香水を盛坏の惣名なりければ

坏に盛水のよし也。金剛頂修習毘盧遮那三摩地法閼

伽、希麟音義五、「上安葛反。或作遇字。梵語卽盛

香水一杯器之揔名也。

○あかはだ 「はだか」を見よ。

○あからさま 俗にいふ所は、明白潔白などい

ふと同じく、隠すくまなき意にいへり。雅言にも、字

は白地、偷閑などを用ひならへれど、心はあからめな

ど云あからせ同じく、からそめつかの間、俗にちょ

つといふ意にいへり。後撰集十九離別「あひしりて侍りける人の、あからさまに越のくにへまかりけるに。ぬさこゝろざすとて云々」枕冊子二「児のめのとの、たゞあからさまといぬるをもとむれば、とかくあそばしなぐさめて、とくことひやりたるに、こよひはえまるまじどて、かへしおこせたる」日中行事に「とくせん、女官御だいをもちて、臺盤所に參りて、おものだなにおく。あからさまにも臺盤のうへにおほやけ物をばおかぬことなり」明衡往来「偷閑光儀曾妨懲臺之劇務歟」○あかゑんば  
「とんぼう」を見よ。

○あかんばう  
「あかご」を見よ。

○あきあはせ  
新撰六帖五、知家「しづのめがきなれ衣の秋あはせはやくもいそぐつちのおとかな」

○あきがた  
伊勢物語に『むかし男有けり。深草に住ける女をやうへあきがたにやおもひけん。かゝる歌をよみけり「年をへて住こしさとをいで、いなばいとゝ深草野とやなりなん』

○あきなすびよめにくはせず  
名嶋隨筆云『世の諺に、秋茄子嫁に不食と云。夫木集に「秋なすび着れ』

わさゝのかすにつけませてよめにはくれじたなにかくとも』是をもておもへば古き諺也。時珍云「生々縮云。茄性寒利。多食必腹痛下利。女人能傷子宫也。とあり」と云り。今按に、右の歌夫木集に見えず。近來刊行せる節用大全にも上段に引て、夫木と記したるはいかなる事か。されどあこざ物語小冊と云物に姑の嫁を憎む事を云て、右の歌を引たれば、何れ近昔のほどの歌にてはあるべし。さてある隨筆にも此諺を論じて、こは姑の嫁を惡みてにはあらず。秋の茄子は腹を冷すが故に、妊娠のおくるゝをひとひたる諺なるを、あしく心得たる也とて、右時珍の文をも引たり。然れどもかの歌に、棚におくともいとへる運び、憎がすて云とこそ聞えたれ。あこざ物語の文は、殊に其一段皆姑の嫁をにくむ事のみひて「いしきものといへば、かくす心になれるこそあさましけれ。されば云々」とて右のうたを記したり。

○あきなひ  
空穂藤原君二十「その物をたくはへて、いちにあきなはいこそかしこからめ」又三十「わがうちあきなふものをこそ、わが身よりはじめは

○あきなひもの　夫木丹一爲頼朝臣「市ひめのかみのいがきのいかなれやあきなひものにちよをつむらん」

○あきびと　頼政卿集「つもりより廣田へわたるあき人のこよひの月をめでざらめやも」古今集序

○あきれる　宇治拾遺二丁「あきれて目もくち

もあきて居たり云々」今此つゝきを以ておもふに、此詞は物に氣を取られて、目もくちもあき廣らけたるまゝにある形容より云出たるにやあらん。

○あく某　「あし某」を見よ。

○悪口　前漢書七十六「王尊傳。素行陰城。惡口不<sup>レ</sup>信」

○あくすゐ　「あくと」を見よ。

○あくた　万葉七<sup>七十</sup>「天なるや姫すの原の草

なかりそね、みなわした香鳥髮飽田志付勿」古今集物名「ちりぬればのちはあくたになる花をおもひしらずもまとふてふかな」堀川百首「世の中をあくたにくゆる蚊遣火の思ひむせびてすぐすころ哉」

○あくた川　「あくと」を見よ。

○あくとよはかゝみをうとむ　二程全書云「明鏡爲醜婦冤」

○あくと　あくすゐ　あくた川　用水　東

國の田舎にて、水田の水を落す小川を「あくと」、も「あく水」とも「あくと川」とも云り。いはゆる用水はある水、是は用なき時に切て落す水なりければ、言の意は則明落の謂なり。伊勢物語に「女えうまじかりけるをぬすみ出て、いとくらきにきけり。あくた川といふ川をぬいてきてければ云々」といへるあくた川も、此あく水の事也。田所にはいづこにも多かり。津國の嶋上郡に其名の川あるも、諸方のあく水の落入所なる故に名となれる也。

○あくにつければせんにもつよし　「惡<sup>ムカシ</sup>惡道<sup>ムカシ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>甚<sup>ト</sup>」則其好<sup>ニ</sup>善道<sup>ヲ</sup>亦不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>甚<sup>ト</sup>　說苑云

註云。紂之徒億萬。跖之徒九千是也。呂氏春秋云「同惡同好志皆欲」六韜云「多黨者進少黨者退」。如<sup>レ</sup>此此群邪比周蔽<sup>ク</sup>賢耳。

○あくび　欠也。源氏朝貌に「宮もあくびうちし給ひて」讃岐典侍日記「さりげなくもてなしつ

「あくびをせられて」築花そわうの夢に「こもちの御まへいたうちあくばせ給ひて」枕草子段に「ひとり、かみさまにかしらさくりあげて、あくびをおのれ打してよりふしめる」驗者のなど見ゆ。言の意は抱吹の約りたるにや。

○惡魔降伏 降伏は、人の撃負て降参するが如く、魔の歸服するを云。後漢書七十六南蠻板楯傳帝從其言遣太守曹謙宣詔教之。即降伏

○あくものぐひ 「あし某を見よ。

○あぐらかく 足を組て、低く座るをあぐらかくと云は、胡床に座る居ざまより、いひそめたる言なるべし。古事記上に「中天若日子天若夜叉胡床之高

胸坂上以死」また雄略段に「立大御吳床云々」大

御歌に「安見し、わが大君のし、まつとあぐらにいまし云々」書紀には「玉纏のあぐらにた、し文布纏のあぐらにた、し」とあり。和名抄に「胡床風俗通云。

靈帝好胡床。京皆作胡床。此間名阿久良」と見ゆ。

記傳云「漢國にて胡床と名づけしは、胡國の制にならへる故なるを、御國にて此等の字を書は、其制をうつせる故にはあらず。たゞ漢國にて胡床と云物の状に、

や、似たるを以て、其字を假れるのみこそあれ、其制はもとより御國の也。阿具良てふ名意は、揚座ならんと師の云れし、さもありなん」といへり。

○あぐる あげや 遊女、藝子等をよぶをあぐると云、こは遊女はもと海岸にすみて、船上に世

わたらひしつれば、船よりよびあげて、遊びけん比の詞の遺りし也。又郭里の娼家に、遊女を抱へおく家と、それをよびよせて遊ぶ家とある、是を揚屋と云も又同じ。此揚屋と云もの、はやく江戸には絶れど、大坂などには今もあり。是ももと船よりよび揚て遊びつる屋のなごりにこそ。

○あこだうり 西瓜

產物誌云「阿古太瓜と云物、夏日より人の賞翫せしに、今はたえて見え

ず。隨分美味なる物にて、其產地より瓜毎に印などを押て出せしに、近世西瓜盛になりしより、いつとなく作らすなりぬ。西瓜は清土にも古くは傳はらず。

元の世祖西征の後、西域より種を傳へて、始て殖と、五雜俎に見えたり。本朝へは寛永の比、琉球より薩摩へ渡す。長崎には慶安の比漸くありとかや。京大

坂へ來りつるは、寛文延寶の比、伊勢洞津の商賈某

が植廣めけりと云り。西をすると云も、後世の唐音

を傳へたるなり」

○あげまき 「あはぢむすび」を見よ。

○あげや 「あぐる」を見よ。

○あさいち 「くさいち」を見よ。

○あさぎ 今淺黄と書て、薄みどりを云は、轉

じたるもの也。續世繼八腹々の「位におはしまさぬほどは、淺黄と、日記に侍るなるを、あをき色か黄なるか、猶おぼつかなくて、花園のおほいどの

に尋ね奉らけるも、をさなくておはしませぬよし、申給ふなど聞えし。一宮の御元服のは、黄なるを

奉れりけるなるべし。位まだえさせ給はねば、黄な

る衣にぞ、まことにもおはしますらん。無位の人はは

黄袍なるべければ、をのゝ簾がおきよりかへりて作りたる詩に、こよ君菊を愛せば、我を見るべし。白きことはかうべにあり。黄なることは衣にありなどぞ聞え侍りし」吉部秘訓抄、建久二年十二月、又

玉葉、建暦二年十一月、親王元服の時の袍の色につきて、くさぐの論あり。黄色の薄きをいへるが本なり、綠色をいふは淺葱の意也など云も、轉じて後の

よせ説なるべし。

○あさくさ

海川のほとりにて、水あせて洲となれる所をあさと云。潮干の時などに、洲の長くつ

いけるを達あさと云、其あさに草の生るをあさくさ

と云。おのが住此淺草も本海邊の地なりければ、その意の名なりけり。夫木抄、廿八、雜、民部卿爲家

「ふる川のきしのあたりのあさくさにつばな波よる

と云。おのが住此淺草も本海邊の地なりければ、その意の名なりけり。夫木抄、廿八、雜、民部卿爲家

「ふる川のきしのあたりのあさくさにつばな波よる

夏の夕かせ」

○あさつき 「ひともじを見よ。

○あさつて 譲岐日記上丁に「何事もこよひ侍

らふべきぞ、あすあさてさぶらふべきこゝちし侍ら

すとおはせらるれば、あまり護摩こそおびたゝしく

侍らへと申給へば云云」

○あざな 玉勝間卷二云「あざ名と云もの、か

の文琳、菅三、平仲などのたぐひのみにもあらず。

古へより正しき名の外によぶ名を、字といへる事多

し。中昔には今のいはゆる俗名をも、字といへるこ

とあり。其外にも田地の字、何の字、くれの字など

云も、皆正しく定れる名としもなくて、よびならへ

るをいへり。いづれも漢國人の字とは別也。其中

に今の俗名をいへるは、漢人の字とこゝろばへ似たり「已上玉」勝間今按に、仁賢紀に「億計天皇諱大脚。字島郎」孝德紀「大伴馬徳連。字馬飼。蘇我臣日向。字身秋」萬葉二十七「大伴田主字曰仲郎」同十六二十「吉田連老字曰石麻呂」靈異記上「字曰山田三郎」同下叶條曰「字彌勒寺」又字曰能應寺」又三十三條「字曰伊勢沙彌」袋冊子引「大伴宿禰佐手丸妻字奈刀自」源氏少女に云「あざなつくることは、ひんがしの院にてし給ふ」榮花初花十五「扇中納言忠輔」又八十「廣幡中納言顯光」同花山十七「まゐらせ賜ひて程もなく、うちなどやけにしかば、ひのみやと世人申おもひたりし尊子泉皇女」同二十「すはうの后尊子」同「かゝやく藤壺」同丁「はづ雪の女御」また「後悔」の大將大將とも、袖中抄「素性は石上良因院にす

抄上なるさの入道後成」また「なゝしの大將」左大臣大鏡二「五條三位後成」また「なでしこの宰相師兼」また「宮毗羅大將八條大將保志卿」續世繼たゞねの床「よるの關白顯隆」同堀川のなかれたうのものとの入道中納言師俊」同苦の「てる中將ひかる少將なりの重家」同草武藏「やまと」の大納言顯雅六條の大御子」今昔十二二十條「現光寺ヲバ禱寺トハイフ」十訓抄「天べんの少將」江談抄三「仰中納言忠輔」同「船路君源道濟」同「大法會師子藤隆光」同「小藏親王兼明親王」古事談「右馬助敦隆」續世繼旅麻床「七日關白、七日弁、ふし柴の加賀、侍脇侍從、物かはの藏人、てかきのすけまさ佐理」よるの關白顯隆「古事談二「紅梅大將」濟時空拜大將なる也といはれたり平治物語「あはの大臣」素性集「そせいがあざ名をよしよりとつけさせ給ふに」袖中抄「素性は石上良因院にすめるもの也」袋冊子云「寛平法皇宮瀧遊覽間號之良因二云云」の類、悉く舉るに遑らざれば、先此等もて其大概を見べき也。此外かの菅三、三耀三善清行文琳文屋廉秀万歳大江平仲平貞等の類も多かれど、此事は右の玉勝間にもいはれたれば省きつ。右等の中には、やゝ漢風に習へるも少しはあれど、大方のさま上古に亦名と云るが如き呼名も見え、又一名は云云といはんが如きも見えたり。されば書籍などの一名も、字といへる事あり。是に就てあざ名てふ名義をおもふに、

交名にて、正名に交たる一名のよしにぞあるべし。  
交の意は後に出す「あざね」「あざへ」「あざはり」「あせくら」など云ことに合せ考ふべし。漢國にては禮記に「已冠而字之。成人之道也」など云て、殊更に負するわざなれど、御國にては右の如く他よりおのづからに呼出たるが如く、又此字といふものゝ曾てなき人も多かり。又稀には二つも三つもある人もあり。袖中抄二に「ひこぼしつまの大夫<sub>藤原忠隆能登太</sub><sub>夫後改名資基</sub>」とあるを、袋冊子には「たなばたつめとも、もみちのもみちとも記せるが如し。猶此類いくらもあるべきなり。

玉海兼實公日記曰「安元三年四月廿日。宣旨依奉射神輿給獄所輩

平利家字平治、同家兼字平五、田使俊行字雄波五郎、藤原通久字加藤太、同成直字早尾十郎、同光景字新次郎、

○あさね 朝寢はうたに、あさいとよむは常なれど、あさねといふも、たえてよまぬにはあらず。新撰六帖一、知家朝臣「あけやらぬねやのひまのみ侍れつ、こひせぬ身にはあさねせられず」

○あざへ 手をあざふ さんまた あせくら

東國のゐなか言に、手をあざへてと云ることあり。太平記三に、中納言具行卿最期條に「六月十九日某と書て、筆を抛て手をあざへ座をなほし給ふとぞ見えし。田兒六郎左衛門尉うしろへ廻るかと思へば、御首は前にぞ落にける」と見ゆ。兩手を打ちがふる也。又手を字書に「兩手相錯也」とあり。是にて繼體紀の「まさきづらた、きあざはり」又萬葉の「あざねゆひたれ」などの語を解べし。又今俗にさんまと云物あり。木枝の二股に別れし所を云。是を三俣と書て、其意と思ふやうなれど、叉股の義なるべし。叉庫と書て、あせくらと云も。三棱の木を打ちがへたるもの也。觀無量壽經三「是故我今來迎接汝。與千化佛<sub>一時授手</sub>、行者自見坐<sub>紫金臺</sub>。合掌<sub>千手</sub>、手讚<sub>千手</sub>、歎<sub>千手</sub>諸佛<sub>云云</sub>」科註叉音差。兩手相錯也。木の朶の股あるものを立て、それに竹棹を渡して、衣類などを干す設にかねて立おくものを、西國の方言に、さまとといふ叉股の義にかなふべし。

○あさめよく 「よのめさのめ」を見よ。

○あざわらふ 古事記中神武段に「此者嘲<sub>アラフ</sub>笑<sub>アラフ</sub>者也」とあるは、字の如く、嘲り笑ふ也。今俗に完爾

わらふやうの意に云ことあるは、淺笑ふ意に思ひたがへての事か。又轉じたる歟。落窪物語一之下に「うちあざわらひたまふ」とあるは、いと軽くして、嘲りの意前後に見えず、既に此程よりにが笑ひの事をいひしにや。

○あし某 あく某 あくものぐひ 繼世繼

衣明の三條のあし宰相家政同故郷の色あし法眼澄貞と云稱

見えた。然れば悪某と云稱は、そのかみあくとは唱へずして、あしと云しにや。文字して書たるは、東鑑

四、惡兵衛尉義廉、同十二、惡權守弘幹下妻四郎同卅四丁

忠別當家同二十、武田伊豆入道光連令義絶、次男信

忠誠三郎などあるも、あしとよびしにや。此外保元物語に宇治惡左府、鎌倉見聞志に、惡禪師公曉、平治

物語に惡右衛門督信頼、源平盛衰記に惡源太義平、

平家物語に惡七兵衛景清等は、皆あくとよび習へり。

是もそのかみは、あしと唱へしか。又本よりあし某あく某と二種有しか、さて此稱を、類屬に背て、逆戦せし人を云といへるに然か見ゆるもこれかれ見ゆ。又中にはさる事もなきに、始より自惡某と名乗て出たるも多し。然れば此惡は古への醜シコと同じく、

惡方にも強き方にも用て、今の俗言に何でもかまはす食ふ人を、惡物食すると云心ばへの稱なりけんや。

○あしらふ 非人番太などいふものゝ、町人

になるを、足あらふといふも、古き時よりの言とぞおぼしき。拾玉集四賀茂法樂百首夏しづのめも大

路井筒に夕すゞみふるかたびらのあし、あらひして

○あしあと 夫木十九難俊頬朝臣「ひまもなく

もりくる雨のあし、音をわがとほつまとおもはましかば」

○あじか ざる 今竹器にあじかとも、ざるとも云名あり。字鏡に「ハ需阿自加又伊佐留」また「ハ筆

穀竹器也<sup>シテ</sup>志太彌又伊佐留」とあり。いかきと云も、

此伊佐留を訛れる歟。其名未見出。猶「ざる」を見よ。

○足利學校 東見記下云「下野國足利學校本是

小野篁舊跡。近代九禾老人都講也。九禾弟子宗銀。其弟子京都相國寺圓光寺信長老三要嗣法。其後閑松院

鐵子。其後睦子居焉。○上杉安房守憲實自大明而求五經正義。藏之學校。大相國

東照宮御時學校書籍。見三二百五十部。龜山口話又明正

使蔣龍溪書「學校二大字」。○慶安四年九月六日予遊足利學校而直逢三陸子和尚懇問之。又有三幅一對畫像。中孔子。左顏子。右子路。古法眼寫之。又堂內有「孔子木像」。學寮有「學者數輩」和漢三才圖會。山城佛閣  
七十二末圓光寺在一乘寺村初有相國寺境内往古下野國足利學校也。東路土產宗祇紀行明日朝利根川の船渡りして、上野國新田庄に禮部當能隱遁ありて、今は靜喜かの閑居に五六日あり云々。靜喜より若殿原あひそへられて、下野國佐野に出たち、足利の學校に立より侍れば、孔子子路顏回此像を懸て、諸國の學徒頭をかたぶけ、日ぐらし居たる体、たふとくかつはあはれに見え侍り。御當家舊跡、一見して千手院といふ房にして、茶などの次に、今夜はこゝにとしひて有しかば、此院主もと見し人なり、かたぐ辭しがたくて、三日ばかり有て遠歌あり」

鎌倉大草紙云「足利學校は、上代承和六年小野篁、上野の國司たりし時勸請」

今按に、公卿補任云「承和五年十二月十五日。止レ官配三流隱岐國。同七年四月召返」と見えたれば、承和六年は隱岐國に流され給ひし時の事也。又上

野國守たりし事も見えず。但し陸奥守たる事はあり。其をりの事にや。此陸奥國中に上野といへる地名もありければ、もしはそれを心得誤りて、かくいひそめたる歟。もとより上總常陸上野は、親王の守にておはします事。天長二年九月庚午、太政官符に見えたれば日本後紀天長の後は、臣下の任國にはあらざる事顯らけし。されど篁卿の執立なるよしは普く傳へたれば、わかき時父の守に屬せられし程の事なりけむかし。

○慶長亂後記 林道春云「足利學校ハ、參議篁建立。我國庠序ノ始ニシテ、書生受業之舊館也。社領二百五十五石アリ。近代九禾老人、次ニ宗銀講誦ス。太閤ノ時儒法漸クスタイル、相國寺ノ圓光寺信長老ト云此社を持タリ云々」

今彼地の人とふに、いつの比より減じけん、近年は社領百石也といへり。

○あしかせ 「てかせ」を見よ。

建長八年百首衣笠内大臣「わがこひはみちのねながれさめやらぬ夢なりながらたえやはてなん」みちは海驥チにて、海馬

とは別也といへど、いづれ相近きものなれば、あしかよりうつして、寐流ナガルとよめりし也。神代紀に海驥皮と出たり。

○あしきゆめをばくにくはす。名物考云「あしき夢を模に食はしむと云は、伯の誤歟。瑠璃代辭二十七難條下引後漢書曰「伯寄食夢。凡使十二神追惡凶」云々」白氏文集明本三十九下にも此事を出せり」とあり。但これにもいろ／＼説あり。或隨筆にも見えたれば省けり。

○あしこ 「あそこ」を見よ。

○あしずり 万葉五四十に「立をどり足すりさけびふしあふきむねうちなげき」九十九に「こいまろび足すりしつ」又八十に「足すりしぬのみやなかん」

○あしだ 下駄 枕冊子六泊瀬詣の所「おひばかりしたるわかき法師ばらの、足駄と云物をはきていさゝかつゝみもなく、おりのばるとて云々同上十二「見苦しき物袴著たる童の、あしだはきたる」

空穂藤原君「くれのあしだはきて」榮花ゆふしで、「とのは小袴きて、あしだはかせたまひて、枕をつきて云々」など見ゆ。此外今昔廿二に「高足駄」同十

二に「平足駄」盛衰記十八に「繩緒平駄」また「町足駄」など云も見ゆ。拾玉集四賀茂法樂百首雜「になひもつざうきのいれこ町あしだ世をゆく道のものとこそみれ」又下駄と云名も見ゆ。義經記三「武藏坊がつらに二くだり物を書たりけり。片頬にはあしだとかく、片つらには書寫法師の下駄にはくとかきとて、辨慶は平足駄とぞなりにける。つらをふめどもおきもあがらずとかきて云々」

○あしてはえびのやうになる 空穂俊蔭下「ちひさき子の深き雪をわけて、あし手はえびのやうにして、はしりくるを見るに、いとかなしくて」氷を碎て魚を取る也

○あしなえたづことをわすれず

前漢書云「韓王信傳云。僕之思フ歸如シテナエ瘦人不ルカ忘ルカ起。直者不ルカ忘ルカ視」

○あしなが 前漢書云「跋人日夜願タビニヨリテ一起。盲人不ルカ忘ルカ視」東坡詩「鳥囚不ルカ忘ルカ飛。馬繫嘗念レニ駄」

○あしなが 「さうり」を見よ。

○あしながになる 陸奥南部津輕のかたほとりにては、長くなりて寐ことを、足ながになると、股長になるとも云とぞ、最上徳内と云人かたりき。古

事記上沼河日賣の歌に「眞玉手玉手さしま毛々那賀爾伊波那佐牟遠云々」とあり。是足を伸てゆるやかに寐るよしをのたまへる也。

○あしのうら 足裏也。後撰雜三「あしのうらのいときたなくもみゆるかな波はよせてもあらはざりけり」連歌也。

○あしのむくかたにゆく 竹取「いづちもく

あしのむきたらん方へいなんとす」大和物語五十一「おやにもはらからにもにくまれければ、あしのむかんかたへゆかんとて、人の國へなんいきける」今昔十九五又十一冊一ト四等にも此詞出たり。

○あしふみいる 夫木丹六雜 信實朝臣「ふる雪のつもるをりこそわがやどにあしふみいれてひとともとひけり」  
○あしらふ あへしらふ あいさふ あいさ  
砂石集七「妻は其人をあしらひてありしほどに、ちごすのこよりおちたり」あへしらふと云を略けるにて、あへは舞、しらふはいひしらふ、引しらふなど下に添て活かす辭也。萬葉四三十に「字波無物可聞人者」また四十に「得羽重無妹にもあるかも

云云」此等の宇波は阿と約りて、饗無妹と云なり。遊仙窟に、嫂會些とも、太能應答とも訓り。今あしらふと云は略語、あいしらふと云は音便也。又あいさふと云も饗爲延の略、あいさつと云も饗幸にて、饗にあづかりたる悦をいひ入るかたより轉りたらんか。後に愛相挨拶等の字を填め來しなるべし。

○あじろ 腹あじろ、竹あじろ、あじろ天井など云、又あじろに組などもいへり。新撰字鏡下竹部に「僚直除反安无之呂」また「簾田點反席也阿牟志呂」とあり。然れば編筵の約れる言也。今あじろと

云は、又其あむしろを省る也。宇治拾遺に、僚筵と書る字、所々に見ゆ。阿无之呂と訓べし。又僚天井とも物に多く見ゆ。昔は此物して天井せし事と見えたり。又車にいふも同じ物也。川にかかる綱代は別也。綱代の事は、雅言部に古圖を出して、布簾等の懸ざま迄委く云べし。

○あしをくはる 金葉、雜「和泉式部かもにまわりけるにわらしへにあしをくはれて紙をまきたりけるを見て云々」

○あせ 畦也。古くは阿とのみもいへり。

神代紀に「毀其畔」古語拾遺に「毀畔古語謂阿波那知」とあり。是をあせとも云は、畔敵の意也。和名抄に「畔田界也。和名久呂。一云阿世」とあり。

○あせくら 「あざへ」を見よ。

○あせこき 好忠集六月中「うとまねど誰もあせこき夏なれば間遠にひとやこゝろへだてん」

○あせになる 落窪一之下「ふたりあせになりていとほしがる」

○あせば 汗のかぶれをあせばと云は、汗瘡の義なるべし。伊は省る言、毛と煩とは親しく通へり。和名抄に「四聲字宛云。佛熱時細瘡也。新錄方云。治夏月熱沸瘡。和名阿世毛」と見えたり。

○あせる せりうり 又いらつ

事をあせると云。万葉五丁に「立阿射里、我俄乞能米登」、しまらくも、よけくはなしに云云」とある、此阿射里と音通へり。又催馬樂大芹に「おほせりはくにのさたもの、こせりこそゆで、もうまし」とあるは、

糞を芹に兼て云る也。双六にもせると云ことあり。糞囊抄雙六條に乞出とあるを、古人の點にせりと訓たり。又博奕にもせると云ことありと見えて、負博

奕此舊近松氏の作といふと云書に「前羅後羅」など云名見

えたり。今商人の言に、市にせる、又せり賣など云、児童のいさかひにせりあふと云類、皆一つ根さしの語なるべし。言の意はせめぐなど、同意歟ともおもへど、たはやすく定めがたし。よく相合せて可考なり。

○あせをかく 万葉九二丁に「熱爾汗可伎なげき木の根とりうそぶきのぱり」

○あそこ あしこ 人をさしてもいひ、所をさしてもいふ。むかしも同じこと也。空穗藏開下に「あそこと少將ともろごゝろにて云云」辨内侍日記上「いづかたに、出たまはんをしらねば、あしここゝに云云」宇治拾遺二十二丁に「こはいかにこゝぞく」とて山しなもすごしつるはといへば、あしこゝとて關山も過ぬ」などあり。彼其所の意也。

○あそばさる 「あそぶ」を見よ。

○あそばす 「あそぶ」を見よ。

○あそぶ 遊ばし 被遊アソバシ 被成アソバカル

古事記  
訶志比宮段に「恐我天皇猶阿蘇婆勢其大御琴」とあるを、傳註に「阿蘇夫とは、管絃を云」といへ

るはたがへり。遊の本は神代紀に鳥遊トリノアシとある如く何事にも樂しきわざして心を遣を云ことなるが、後に管絃をたのしきわざとして、其を直にあそびと云ることもあれど、それは末也。雄略天皇大

御歌に「やすみし、わがおほきみの阿蘇アス妻志シジ斯し、  
のやみし、の云々」萬葉十三二十に「云云登之而國見所遊」などの類は、今も貴人の爲賜ふ事を、あそばすと云と同じくて、崇めごと也。今の俗文に、何事の上にも敬ひては、あそばし、被遊と云も、是に准へて知べし。又被成と云も、爲を活かしたるにて、同例のいひさまなり。又暇ありて休らひ出行などを云も古今同じことなり。崇神紀に「比賣那素寢殊望ヒメナシタニシタニ之遊ノシテ」天智紀に宇知波志能都梅能阿素弭爾ウチハシノツノミタニシタニでませし」古事記上卷に「成ニ麗壯夫アカルハシキタコニ而出遊行」萬葉五十九に「あが駒に、しづ鞍打おき、はひのりて、阿蘇比あるきし、世中や、常にありける」などあるが如し。此外万葉集中にあそぶと云こと四十首ばかり見えたれど、管絃を云るは一首もなし。然れば七日七夜遊アソブキとあるなども、あそぶはた「樂しむ方にかゝりて、管

絃を指る詞に非ることを知べし。又今世に、文章中に浮たる字のまじれるを、あそび字といひ、又打たる釘などの結り利ざるを、あそぶと云類は、右の休息の意に准へたる詞なるべし。

○あだ あだはかなき也。今もあだなうき世など云へり。古今集物名貫之「われはけさうひにぞ見る花の色をあだなるものといふべかりけり」又あだくしき意にもいへり。同じこと也。源氏朝貌に「今さらのあだげも、かつは世のもどきをも、おぼしながら」又、「うちあだげすぎたる人の」菊花本の零「つゆをだにあだしとおもひて朝夕にわがなでしこのかれにけるかな」今色ごのみの人を、あだものといひ、又花やかな衣きし人を、あだな形などいふも、是より轉りたるにや。此外たを清て、あたがたきの意に云類の言は、雅言部に委く出たれば省きつ。

○あたかも 恰字をよめり。萬葉十九二十に「わがせこがさゝげてもたるは、かしは安多可毛似加青蓋カシハシタカモニシタカシタケ」彼か此かの意なるを省きて他一方を云なるべし。

○あだごと 相模集「いろふかき山の松をおきながら何あだごといふきなるらん」新古今長能「あだごとの葉におく露のきえにしをあるものとてや人のとふらん」空穂藏開「あだごとはおとなくき、し松山にめにみすくもこゆる浪かな」字鏡に「讃伊豆波利已止又阿太已止」

○あだごと 「くわあそび」を見よ。

○あたゝか 万葉三三十「しらぬりのつく」の綿は身につけていまだはきねと暖所見」

○あたゝまる 夫木舟二大江千里「あくまでにみてるさけにぞさむきよは人の身までにあたゝまりける」

○あだな 今俗にあだ名と云も、右のあざ名に似たる事あり。そは榮花物語に、後悔せる事ありし人を後悔大將といひ、又參らせ給ひて程もなくやけしかば、火宮と世人申きなどの類は、もはら今云あだ名といふものゝ如し。さらば今云あだ名は、彼あざ名を訛りたるかと思ふに、もとより別也。そは字の方には手書の佐理、待よひの侍従など、譽たるもの多かれど、此あだ名と云ものは、悉く誹れるのみに。

て、ほめたるは見えず。然ればあたは讐敵の意にて、其人の爲によからぬ名のよしなれば、もと清音なるべきを、濁り來しは俗言の故なりかし。

○あだね 夫木舟六雜殷富門院太輔「夕すゞみあだねの床のあけ方にすだれうごかし秋は來にけり」

○あたひ 直 直段 直をあたひと訓も、

あたる意也。其物の價に當るよし也。そは直價のみにあらず。直を其まゝ當の意につかへることあり。下に引べし。又直價を禰と云は、餉代酒代など云ふ代の通音也。西漢書四十九匈奴傳下或說根曰匈奴有<sub>ノ</sub>計入<sub>ニ</sub>漢地<sub>ヲ</sub>直<sub>シ</sub>張掖郡<sub>ニ</sub>云々。註直當也

○あたま 「かうべ」を見よ。

○あたむ 源氏玉縷に「この監にあたまれば云々」とある、こは今云と同じく、一つの詞也。萬葉二に「敵見有虎可吼登」とあるは、書る字の如く、虎の敵を見て怒り吼るを云歟。又あたむと云詞を、あたみとつけたる歟。體かならず。

○あたる こは今の人があたるとも、あてつくとも云、當る也。そはうらめしく思ふ事のあるとき、其人にてつけてものするをいふ。隆信集物名ものこし「つらしとて我さへつらくあたるよに人のうらみも残しつるかな」物語書等には、此あたるをもじごゑにて、たうといへる事多し。

○あちこち 中務日記に「こゝはあちこちおぼしゆひまして」

○あちはふ 伊勢物語に「此うたはあるが中にもおもしろければ、心とやめてよますばはらにあちはひなかるべし」

○あつかふ 好忠集五月中「のどかにてすゝしかりける夏の日もおもひあつかふこともなき身は」

○あつかましい 「つらの皮の厚い」を見よ。

○あづきがゆ 土佐日記「正月十五日けふ、あづ

きがゆにす」空穂藏開「あかき御かゆ一をけ」和泉式部集「あづきおものといふものを、ひとりの桶にいれて、十二月ばかりに「かくばかりさゆるにあづきのするはひとりのをけのあればなりけり」公事根源云「今日獻御粥云々。寛平の頃より年毎にこれを奉る」延喜主水司式云「正月十五日供御七種粥料米一斗五升。粟黍子。稗子。堇子。胡麻子。小豆各五升。鹽四升云云」

○あつけ 夏わづらふを、あつけと云る是也。

藤原爲忠朝臣集「涼しくも衣手からしみそぎ川あつけはらひてかへるさのもり」是は暑氣なり。狹衣に「夏つかたより母うへなやましげにし給ふを、れいもあつけにはさのみこそと云々」是は病のかた也。二つともに今もいへり。

○あつたらもの 可惜ものを云。仁德天皇大御歌に「阿多良須賀波良」雄略記二十に「ア・拖・羅・陀・俱・彌・幡・夜」また阿・拖・羅・須・彌・幡・万葉三十三に「思惠也安多良思」後撰集三春下源信明「あたらよの月と花とをおなじくば心しれらん人に見せばや」此等のあたらを音便にあつたらといふ也。皆惜む心にいへり。

○あづまからげ

新撰六帖五信實朝臣「しづの

めがあづまからげのあさごろもふたまた川はさぞわ  
たるらん」

○あつまる 集る也。紀貫之集秋「七日男あま

た庭にあつまりて天河を見る「大そらはかひもなけ  
れどたなばたをおもひやりつゝながめつる哉」

○あつめる 賴政集春「くれぬまは花にたぐへ  
てちらしつるこゝろあつむる春のよの月」

○あつもの 「ひしほす」を見よ。

○あづらへ 紀貫之集「あづらへて忘るなどお  
もふ心あればわが身をわくるかたみなりけり」説徒

了切。遼上聲。說文相呼説也。史記吳王濞傳。使中大  
夫應高説膠西王無文書報。註「謂以微言動之也。又説

藏弄言。呂覽添「辟説。越智溢之音出」戰國策陳軫說  
秦王。楚有兩妻人。説其長者」

○あて いくつあてなど云宛也。空穗藤原君十二

丁セ「あたらしくとも人は十五人、つけ豆を一さやあて  
に出すとも、とをまりいつゝなり云々。ぬがごをひ  
とつあてに出すとも、とをまりいつゝなり云々。」

○あてこすり 「こすり」を見よ。

○あどうづ

空穗藤原君「四十」さて物がたらひも

うち聞えんか、しれるどちこそあとがたりもする  
なれ。さやよくの給へり。この比は願はしきものな  
り云々」山岡氏云「あとがたりは、今俗にあどうづ  
といふことなり。物語の應答する事也」といへり。  
其比迄は江戸にても人の咄しのうけ答するを、あと  
うつといひしにや。ゐなかには此言遺れり。後撰集  
のあとうかたりをも合せ考ふべし。

○あとのがんがさきにたつ 空穗後蔭下「あや

まちしたる雁のこゝちしてなどの給へば、佐の君う  
ちわらひ給ひて、さきにたつ雁こそありづらめ云々」  
とあり。是を見れば、今云諺も皆久しき時よりいひ  
傳へし言どもなり。

○あとをくらます 隆信集下「五十」世の中あちき

なきよしなどいひて、あとをくらくしてうせなんと  
「おもふ」源氏繪合「いにしへのすみがきの上手どる  
あとをくらうなしつべかめるは」小袖云「今云一足な出  
と字治拾遺三十八」ことをここにかたはれて、あと

をくらうしてうせぬ」

いふわざするは、穴印地といふ事なる歟。むかしも印地といふわざ見えたり。それは石以て打るなり。

盛衰記廿二に云「若者共ガ軍ノ様コソヲカシケレ、何ノ料トテ命ヲタクハフベキゾ。京童部ノ向ツブテ河原印地ノ様ナリ」同卅四に「向飛礫ノ印地冠者原」又出所未考『貧しとて春まくべきかてなかりけるによしありければ、定家のもとへ曉月坊「曉月がしはすのはてのそら印地とし打こさん石ひとつたべ」返し、定家「定家がちからのはどを見せんとて石を二つにわりてこそやれ』又年中行事繪卷物五月端午節の條にも印地の繪あり。猶「いんぢ」を見よ。

○あなた　あなた　好忠集戀「君こふとしのびくに身をやきて風のあなたはひとなしけん」空穂「只こそ大かたは父おとゝのいますかれはこそ、かくあなたづり給へ、いますからすば何かつゝまん」落窓一下「あやしうおのがいふ事こそ、あなたづられたれ云々」大鏡序「されば老たる身はいとかしこきものに侍り、若き人たちおぼしなあなづりそと

て云云

○あなた

「あなたづる」を見よ。

○あに　あね　おとうと　いもうと

兄

姉は、雅言も俗言もたがはず。弟は和名抄に「爾雅云。男子後生爲弟。和名於止字止」とあり。今云所是に同じ。古くは男女にわたりて云稱なりき。字登とそへいふは、夫を「をうと」妹を「いもうと」と云類にて、弟人、夫人、妹人なるを、音便に引ていへる也。また「爾雅云。女子後生爲妹。和名伊毛宇止」とあれども、古へは姉に對へて、後に生たるをば、女をも弟と云て、妹とはいはず。中昔までも然にぞ有ける。後に生れたる女子を、妹と云は、男兄に對へ云稱也。姉に對へては弟とのみ云て、妹と云る事なかりき。然るを後世には、姉に對へても妹とのみ云て、男ならでは弟とはいはず事となりけるは、漢籍に姉妹と云るに、めなれたる轉りにして、皇國の古の稱にたがへり。和名抄なども、只漢さまによりて云るものなり。まことは中昔迄も、古への如くにて姉に對へては弟とこそ云つれ。古今集雜上詞書に「妻の弟をもて侍りける人に云々」源氏花宴に曉月夜君

の事を「女御の御おとうとたちにこそあらめ」などある類にて、姉に對へて妹と云ことのなかりし事を知べし。源氏等木四十「あね君はあそんのおとうとやもたる」とあるも、俗に云妹人はあるかと、源氏の給ふ也。されば一條天皇の御世まではしかなり。

○あに 豊也。今童女また賤者などの、否然らずと思ふとき、「なあに」と云是也。「なあに」は否豈の意なるべし。仁德紀に「あによくもあらず」續紀詔詞に「かはることは豈あらじと」萬葉四三十「わが戀にあにまさらじか」十六「あにもあらずわが身のからに」などあり。是は俗語ならねど、伊豆島其外今も云國ありと云れば出しつ。

○あねさん

「あねこ」を見よ。

○あに うへさまと見よ。

○あねご あねさん 大かたの女を指てあねごと云は、ひたぶるの俗言のやうなれど、熱田寛平縁起日本武尊御歌に「あゆちがたひがみ阿禰古はわれこんと床さるらんやあはれ阿禰古乎」是れ水上の宮酔媛を指し給へる也。式に尾張國愛智郡火上姉子

神社あり。彼媛を祭るといへり。曾根好忠集冬「神まつる冬は半になりにけり、あねごがねやにさかきをりしき」今又しらぬ女を指てあねさんと云こと、通り言のやうになりつるも、此あねごの稱弘りて後のことなへなりかし。

○あに

豊也。今童女また賤者などの、否然らずと思ふとき、「なあに」と云是也。「なあに」は否豈の意なるべし。仁德紀に「あによくもあらず」續紀詔

詞に「かはることは豈あらじと」萬葉四三十「わが戀にあにまさらじか」十六「あにもあらずわが身のからに」などあり。是は俗語ならねど、伊豆島其外今も云國ありと云れば出しつ。

○あに 伊勢集に「うちまゐりつかうまつるあひだに、此男も見かはして云々。今は、あの人は

よにもとはじ、なにかたのみ給ふ云々」此言既にも出たれば省きつ。

○あのはす 配偶なり。古事記穴穂宮段に「若日下王欲婚大長谷王子」また列木宮段に「云云合於手白髮命」などあり。

○あはせいと 堀川百首國信「みつ引のあはせ

の糸の一すぢに分すよ君をおもふ心は

○あばた 頭に痘瘡の跡のつけるをあばたと云は、鎮火祭祝詞に「伊邪那美命云々。吾乎見阿波多志給比津止申給氏」とある、此阿波は醜きを顯はして、耻を見せ給ふと怒りませるよしなれば、もし此意の言なる歟。又痘跡の約轉歟。又容貌の荒る小瘡をはだけと云に合すれば、荒畠の謂歟。

○あはぢむすび あげまき 此むすびの名は、鎮魂祭のあわ緒をうつせしより出たる也。万葉四に「玉の緒を沫緒によりてむすべらば在て後にもあはざられやも」とある是也。此沫緒と云は、彼祭の萬宮の内へ魂をいはひ納て、五色の糸を縦横に十條かけて、其糸に搓をつよくよりちむる形狀の、水の泡の結ばれ沌れたる如くなるより、沫とはいふなり。されば此沫むすびを、とけがたき事にも、解やすき事にもよめり。貫之集に「春くれば瀧のしら糸いかなればむすべども猶あわみゆらん」又清少納言のうたに「うは水あわにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりぞ」これらのあわも鎮魂祭より出たるなり。是らの事は別に考へおける物あれば、

省きつ。又あげまきと云結びは、總角の束髮於額の形に結びうつせるよりの名也。總角の事は、万葉集

又催馬樂等の歌釋に云へば、こゝに省けり。紐の事は、軍事書云「上卷を鎧に付る事は、軍中にて手負たる者を介抱して、負行ん時の用意の具也。寸法一丈五寸なり。手を負たる者あれば、其手負の總角を取て、負てやる者の總角の上へ、手負人を負なり。負れたる者の總角を、前へ引あげて、負ふ時は、負れたる者と負たる者との間の隔に、總角がなる故に鎧の金物すれ合ざるなり。是武門の故實ながら、知人鮮し云々」とあり。翠簾の紐もさるやうこそはあるめ。

○あはびのかひのかたおもひ 俊成卿片戀「浪かゝるいはねにつけるあはび貝こやかた戀のたぐひなるらん」萬葉十一〔四〕「餽貝之獨念にして」また「礎貝之獨戀耳」

○あはむ 古事記傳淡嶋釋云「此嶋は今吾所生之子不良と詔へるを以ておもふに、源氏帝木に爪はじきをしていはん方なしと式部をあばめにくみて、少し宜しからんことを申せとせめ給へど云々。なほ

明石卷、處女卷、總角卷、宿木卷、又紫式部日記などにも見えたり。あばむともあばむとも活用く言也。此阿波米惡みを河海抄に、淡惡と釋れたる其意也」と有り。さる事歟。又按に、中古後あはめ惡むと云るは、婆を獨りていひならへれば、もしさ是墓など云と同語にて、いひ破る意にはあらざる歟。あはら離、あはら骨なども、同語と聞ゆ。かの淡島の淡は、淡薄の意にて、瘦地のよしならんにや。猶可考。

○あばよ 兒女等の友に別る時に、あばよと云て、互にわかるゝことあり。こは又逢ばやといふ意の詞なるべし。

○あはらかくし 拾遺集雜秋よしたゞ「秋風はふきなやぶりそわがやどのかはらかくせるくものすがきを」あはらの意既に註す。

○あはらばね 「あはらや」を見よ。

○あはらかくし 拾

遺雜秋よしたゞ「秋風はふきなやぶりそわがやどのかはらかくせるくものすがきを」堀川集「草ふかきあはらのさとのすまひして露のいのちのほどぞしら

る」永久四年百首仲實「くる人もなきあはらやの柴の戸はみねの嵐にまかせてぞ見る」堀川百首師時「雲かゝる山のたかねのあはらやは月のやどるぞうれしかりける」此外多かれど省けり。あはらとは毀壊と同言にて、家の古き新きにはよらず、開壊たる如くに、壁障子等のなきを云。伊勢物語に「あはらなる倉のありけるに、女をおくにおし入て」と云も、戸じまりのなきよし也。和名抄に「亭阿波良一云阿波良也」とあるも同意也。其より壊れ破れて開透の多くなるをも云。あはら骨も、肉筋などもなき骨のよし也。今俗に胸脇の骨を云は、骸骨となりて離れてもなる所ゆゑに云。又あはれ者と云は、物を投破りなどして、あはらにこぼつ方もて云也。紙の破れたる障子を、あはら障子といひ、戸のなき家をあはら素戸と云を合せておもふべし。

○あはれもの 「あはらや」を見よ。

○あひおひ 高砂の謡のあひおひの松と云詞の

弘りて、なべての人の相生と心得てものするを、俗なる事と思ふやうなれど、此あひおひと云ことにはいろ／＼の意あり。其委きことは、雅言部に出せる

を見て知べし。こゝに又相生の意の證とも成べきを、

一首見出たれば引おく也。惠慶法師集子日所「ふた葉よりあひ生しても見てしがなけふちぎりつる野べの小松と」此人は拾遺集の作者にて、殊に歌仙たる

人なりければ、いひけちがたからん。

○あひくち 室町殿日記に相口小刀見ゆ。また貞觀儀式、大嘗會用物中に、阿爲刀子卅柄と云も見ゆ。是はいかなるを云歟。

○あひむこ 相聲也。落窪物語一之下「いときよけなるあひむことり給うてけるかな云云」

○あひやけ 兄弟の家又は本家分家の間を相やけとも、相やけ共ともいへる事あり。こは屯倉、朝廷、家柄、家持など云類のいひなしなり。如此家を夜氣とも、夜加とも云は、所の活ける言にて、屯倉は御家所、朝廷は大家所、家柄は家所柄、家持は家所持の義なるが如し。然ればあひやけは相家所にて古言の遺れるものなり。

○あびる 今湯をあびる、水をあびるといふ。あびる也。古事記倭建命段に「川阿美」と見え、萬葉十六丁に「さしなべに湯わかせ子ども云云狐爾安牟

佐武」

○あふぎをならす 竹取物語「あるはうそをふき、あるはあふぎをならしなどするに」  
司等」とあり。

○あぶない 建禮門院右京大夫集上「いづれのとしやらん、五せちのほど内裏にちかき火の事ありて、すでにあぶなかりしかば、南殿にようよまうけて、大將をはじめ衛府のつかさのけしきども、心々におもしろく見えしに云々」

○あぶらしばる みそしろ 空穂藤原君 二十  
「うごまはあぶらしばりて賣に、おほくのせに出て、そのかすみそしろへつかふによし」と見ゆ。又俗に糟主親などに異見せらるゝを、あぶらしばらるとも、あぶらとらるゝとも云ことのあるは、是に譬へたる詞也。又胡麻の糟を味噌代にくはへ入るゝ事、今も

ある事也。今は味噌下といふとぞ。  
○あぶらわな 下總國葛飾郡關宿のかたはとり

五箇村といひて、十三村一嶋の民家あり。其郷にて  
は、綿の實を槌もて打碎て、そをよりつゝけて、火  
燈といふ土器に入れて、ともし火とせり。其綿の實  
をあぶら綿と云を、其名古くも見えた。若いにし  
へのあぶらわたも同じものなる歟。猶可考。山家集  
下「きえぬべき法のひかりのともし火をかゝぐるわ  
たのみさきなりけり」今物語に「ともし火のつきた  
りけるに、あぶらわたをさしたりければ、世にかう  
ばしく匂ひけるを云々」これらに實さきといひ、か  
うばしき匂ひといへる、もはら同じものと見えた  
り。

○あふる 戸びらなどの風にあふると云あふる  
也。神樂早歌に「あふり戸やひはり戸ひはり戸や  
ふり戸」秘抄云「あふり戸は腋戸の風にあふらる  
を云」とあり。

○あぶる 万葉九十丁に「<sup>アブリホス</sup>猿千人もあれやもぬれ  
きぬを」又十一「<sup>アブリホス</sup>猿千人もあれやも家人の春雨すらを  
間使にする」字鏡に「焚、焚、熐、以<sup>レ</sup>物入<sup>レ</sup>火之貌。保  
須又阿夫留」また後漢書七十馮異傳に「光武對<sup>レ</sup>鼈燈  
レ衣<sup>レ</sup>燐矣」

五箇村といひて、十三村一嶋の民家あり。其郷にて  
は、綿の實を槌もて打碎て、そをよりつゝけて、火  
燈といふ土器に入れて、ともし火とせり。其綿の實  
をあぶら綿と云を、其名古くも見えた。若いにし  
へのあぶらわたも同じものなる歟。猶可考。山家集  
下「きえぬべき法のひかりのともし火をかゝぐるわ  
たのみさきなりけり」今物語に「ともし火のつきた  
りけるに、あぶらわたをさしたりければ、世にかう  
ばしく匂ひけるを云々」これらに實さきといひ、か  
うばしき匂ひといへる、もはら同じものと見えた  
り。

○あへぐ 萬葉三三十丁に「海路爾出而阿倍寸管我  
携行者云云」又「阿倍豆携行」とも多く云へれば、敢  
と云言の活けること歟。又喘をアヘグと訓も同じ言  
也。右の阿倍寸管も、船人の勞を云るなれば、其意  
かよへり。又敢而と云も俗にのしきつてといふ意な  
れば、ついには皆同じ。今俗に云所もいさせき切て  
といふ意に用へば、是も同じ。  
○あべこべ 物のうらうへに行ちがひたるを、  
あべこべと云。是も右に准へておもへば彼方此方の  
意なるべし。

○あへしらふ 「あしらふ」を見よ。

○あま 今ゐなか人などの言に、いたく病みて死んとせしに、おもひがけず命いきたるを、あまのいのちをひろひぬと云あまなり。曾丹集三百六十五首中二月終「はるぐ」とうらへけぶりたちわたるあまの日よりにもしほやくかも此歌のあまは只海人の意のみにはあらず。右の意を兼たり。かの田舎人の詞なれば、是らの古語聞しらずやならん。此外これかれのうたに見ゆ。心つくべし。

○あまい かたい やはらか 古事記上卷に「天神御子之御毒者。木花阿摩比能微坐云云」傳云「阿摩比は脆く不堅固意と聞えて、甘と同言なり。物の堅固からぬをあましと云る事は、漢籍にも、莊子天道篇に、劉輪徐則。甘而不固。註に甘緩也など云り。今の俗言にも多く云ことなり。「甘い事をいふ。甘い事では行ぬ。甘い奴じやなどの如し。又人の身の病なく健なるを、「堅い」といひ、病ありて弱きを「柔」と云。此柔も甘さに近し。又天の清く晴て、雨のふるべきけしきの更になきを、「日よりの堅い」と云ひ、堅からぬを「甘いと云う」とあり。

○あまがつ おはま あまやかす あまくち 源氏傳に「おばしすつまじきをたのみにて、あまえて侍るなるべし」狹衣三中四十二丁に「あまえて」此外源氏竹川十四丁、同宿木九十二丁等に大鏡八に「勅なればいともかしこし云云。何者の家ぞと尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしのみむすめの住所なりけり。遺恨のわざをもしたりけるかなとて、あまえおはしましけり」同「わ殿の聞わかせ給へば、いと、今少しも申さまほしきなりといへば、侍もあまえたりき」とあり。甘擬の省れるにや。子どもをあまやかすともいひ、又緩き人をあま口と云なども、甘きより出たるなり。「あまい」の條をも考へ合すべし。

○あまがつのやうじや いたく瘦たるをあまがつのやうじやとも、あまがつのやうになりたるとも云ことあり。天兒は御撫物の偶人にて、今云這子の類也。御贋物の金人銀人の事は、延喜式第一に委し。偶人の事和名抄十三祭にもいで、物にも多く見ゆ。撫物の用ひざまは、後醍醐天皇日中行事に出たる尤詳か也。此等の事は異ものに出せれば、こゝには引す。天兒の事は保憲女集「おはなさにかきなでながすあ

「まがつはいくその人もふちを見るらん」榮花本の「あまがつなどのものいひうごく」とも見ゆ。和泉式部集「なき事を人なげくと聞て、我をあまがつにせよ」といひたるに「あまがつにつくともつきじうきことはしなどの風ぞ吹もはらはん」源氏薄雲「御はかしあまがつやうのものとりてのる云々」又「あまがつは三歳まで身にそへて持」など見ゆ。近昔迄も用ひしもの也。小笠原家傳書云「御伽這子は目出度年寄の方より參らすべし。天兒を略く時は、輿の先乘あるべし。小袖の事天兒前也。天兒を見る時は、這子は略く方もあり。是は天兒の略なれば記に及ばず云々」と見ゆ。物に寫せし其古圖を見るに、頭のみ人形にして、胴は竹を十文字にあはせたるばかりの物也。故瘦たる譬へにいひ傳へたるにこそ。

○あまぎぬ　かつば

台記、仁車記などに、

「雨衣」と見ゆ。こは平絹に蠟を引て、今俗にいはゆる合羽といふものなれば、即て合羽といふもの訓ともすべき也。又中古のうたに、みのしろ衣といへるき、蓑代衣にて、蓑の代りにきるなれば、此雨衣と同じ心はへながら、雨衣は殊更にまうけおくを、蓑

集「なき事を人なげくと聞て、我をあまがつにせよ」といひたるに「あまがつにつくともつきじうきことはしなどの風ぞ吹もはらはん」源氏薄雲「御はかしあまがつやうのものとりてのる云々」又「あまがつは三歳まで身にそへて持」など見ゆ。近昔迄も用ひしもの也。小笠原家傳書云「御伽這子は目出度年寄の方より參らすべし。天兒を略く時は、輿の先乗あるべし。小袖の事天兒前也。天兒を見る時は、這子は略く方もあり。是は天兒の略なれば記に及ばず云々」と見ゆ。物に寫せし其古圖を見るに、頭のみ人形にして、胴は竹を十文字にあはせたるばかりの物也。故瘦たる譬へにいひ傳へたるにこそ。

○あまくち　「あまえ」を見よ。  
○あまごひ　今世にも郷村にてはする事なれど、後世にはなまざかしき人多くなりて、上にたつ人までも、俗なる事のやうにおもふめる故に、かるわざもおのづからうすろざて、なほざりに成にけり。萬葉十八<sub>二丁</sub>「天平感寶元年閏五月六日以來赴小旱百姓田畝稍有凋色也。至于六月朔日忽見雨雲之氣仍作雲歌一首并短歌一絕「すめろぎの、じきます國の、天の下、四方の道には、馬のつめ、いつくすきはな、ふなのへの、いはつるまでに、いにしへよ、今のをつゝに、よろづ調、まつる司と、作りたる、其なりはひを、雨ふらず、日のかさなれば、うゑし田も、まきし烟けも、あこ毎に、しばみかれゆく、其を見れば、こゝろをいたみ、みどりごの、乳こぶがごとく、天つ水、あふさてそまつ、足引の、山のたをりに、この見ゆる、天の白雲わだつみの、おきう宮べに、立わたり、との疊りあひて、雨も賜はね」反

歌「此見ゆる雲はびこりてとの曇り雨もふらぬかころたらひに」右二首六月一日晩。頭守大伴宿禰家持作之。賀雨落歌一首「わがほりし雨はふりきぬかくしあらばことあげせずとも年はさかえむ」とあり。此時家持卿越中國司たり。今の世にも其國を治むる人々は、かくこそあらまほしけれ。事のついでに心におぼえたる雨乞の歌を二三首記す。小町集古本に『醍醐の御時に日でりのしければ、雨乞のうたよむべき宣旨に「ちはやぶる神もみまさば立さわぎ天のと川のひぐちあけたまへ』小大君集『醍醐の御時に日でりのしければ、雨乞の歌よむべき宣旨ありて「ちはやぶる神もみまさば下金剛』金葉集雜下に『範國朝臣にぐして伊與國にまかりたりけるに、正月より三四月まで、いかにも雨のふらざりければ、なはしろもえせで、よろづに祈りさわざけれど、かなはざりければ、守能因にうたよみて、一宮にまゐらせて、雨祈れと申ければ、まゐりて祈り申けるうた、能因法師「あまの川なはしろ水にせきくだせあまくだります神ならば神」神感ありて大雨ふりて、三日三夜や

ます」と家集に見えたり。西行家集に『高野より粉川などへ參りて、吹上見むとてまかりける道より、大雨大風吹て、興なくなりにけり。能因法師が苗代水にせきくだせとよみて、いひ傳へられたる物語とて、社にかきつけける「天くだる名を吹上の神ならば雲はれのきて光りあらはせ」「苗代にせきくだされし天河とむるも神の心なるべし」かく書たりければ、やがて西の風かはりて、忽に空はれける云々』鎌倉右大臣集に『建暦元年七月洪水漫天、土民愁歎せん事を思て、一人奉向<sup>ノ</sup>本尊<sup>ノ</sup>教致<sup>ノ</sup>祈念<sup>ニ</sup>云々「時により過れば民のなげきなり八<sup>寶</sup>大龍王雨やめ賜へ』

○あましもの頼政卿集『天の原あさゆく月のいたづらに世にあまさる、心ちこそすれ』武烈紀の歌に「汝をあましにやかくぬくみかき」とある、此あましも今云あましものゝ意を、垣によせての給へる也。

○あまつさへ 剩也。こはもとあまりさへといふ言なるを、あまさへと約めたるを、俗言にはあまつさへと音便にいひなせる也。夫木廿六「鶴もすみ松もおひたるこゆるきの磯のあまさへ千代をこそい

のれ」此うたあまへと云に、蟹さへを兼たる也。

○あまで 「にがて」を見よ。

○あまのざことも 「あまのじやく」を見よ。

○あまのじやく 「あまのざことも こしやくなや

つ。此言天探女を訛り傳へたる詞なるべし。神代紀に「天探女此云阿麻能左惣謎」口訣に「天探女者從神讖女也」といひ、和名抄鬼魅類に「日本紀云。天探女和名阿万乃佐久女」といひ、忌部家古説に「探女探他心多邪思也」などいへる、後世の談に云る、あまのざことよく當れり。又落窪物語に「勿さくじりそ云云あこきといふさくじり」源氏物語にも「さくじりおよすげ」とあるさくじりも、記傳にいへる如く、探女の義にかよへり。是につきておもふに、今世にござかしくさくじりものする兒女などを、こしやくな奴などいふも、又同意と聞ゆ。

○あまめ 「あめ」を見よ。

○あまやかす 「あまの」を見よ。

○あまやどり 催馬樂妹之門に「あまやどり笠やどりやどりてまからんしてたをる」藤原元真集「わ

されたる女の家に、雨やどりしてなたを、今はこゝにかといひたり云々」堀川百首顯仲「かり庵にあまやどりする時のまを山田もるとや人は見るらん」うた人は多く笠やどりといへども、あまやどりとよみたるもの多かり。

○あみのめにかせとまる 後撰集よみ人不知「玉だれのあみめのまよりふく風のさむくはそへていれんおもひを」六帖に人の心をいかゞ頼まんといふ句に、貫之「あみのめにふきくる風はとまるとも」兼澄集に、人にきぬをおくるとて「ぬきふとみ風とまるべくあらねどもこを網のめのためしにはひけ」散木集に「おもはんとたのめしことは網のめにたまらぬ風のこゝちなりけり」

○あめ あまめ 餅也。甘き橘を阿倍橘と云ふに合すれば、只甘き謂歟とも思へど、ゐなか人のあまめとも云ことのあるを思へば、甘滑の約れる言なるべし。甘く滑らかなる物也。味噌豆より出る滑を、直になめと云類也。和名抄に「餅和名阿女。米糞前也」また「蜜知甘飴也」と見ゆ。神武紀に飴字を、タナネと訓たり。もし古言なる歟可考。

○あめがふる　児童の泣出すを、雨がふるといふことあり。古事記八千矛神の御歌に「汝がなかさまく阿佐阿米能佐疑理邇多々牟叙云々」万葉三(五十)に「吾泣涙、有間山、雲居輕引、雨爾零寸八」(猶さめぐとなく)を參照せよ。)

○あめぢまき 「ぢまき」を見よ。

○あめつちをふくろにぬふ 蟻蛉日記中「いづらこに、人々今年だにいかで事忌などして、世の

中心みんといふを聞いて、はらからとおぼしき人まだ臥ながら、もの聞ゆ。あめつちを袋にぬひてと誦するに、いとをかしくなりて、さらにもみには三十日こそ、夜は我もとにともいはんといへば、前なる人々わらひて云々」相模集「あめつちの神のひろめんさいはひを袋にうけてかへりにしかな」狹衣「持給へりける扇のおかれけるが、手習せられたるは、手づからしわざにやと、ゆかしうて取見給へば、まだはかぐしもつかぬ文字どもの、いとをさなくあさましきさまなるは、何と見すぐべうもあらぬを、せちにまもれば、あめつちを袋にぬひてとあるは、母代がならはし聞えたるいはひととなめり」一條大

納言歌合號法性寺殿題石名取、右「あめつちのふくろの數し多ければ思ふ事なきけふにも有かな」女房私記、「正月御かゞみのもちひいはふ時よむべき歌」天地をふくろにぬひてさいはひを入れたればおもふ事なし」など見ゆ。此歌今も邊土にては、正月の吉書に用る所あり。又頼母子といふものを取まじなひに唱ふる事ありとぞ。

○あやかる 拾遺難戀「風はやみみねの葛葉のともすればあやかりやすき人のこゝろか」林葉集五「たのめおきしよはとおもひてくれはとりなに、あやかるこゝろなるらん」堀川百首俊頼朝臣「何ごとにたのむとなみはあやかりていとふ涙のしのにちるらん」など見ゆ。今の人があえと云のみを、雅言とおもふやうなれど、あやかるとよめる歌、此外にも多かり。あやかるは肖拘(ヤクル)にて、かるはまたぐをまたがると云と同じくて、此物の彼物に肖かゝる謂也、さて徒然艸六十一段に「御産の時瓶(コシキ)おとす事は、さだまれる事にはあらず。御胞衣とこほる時のまじなひなり。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里のこじきをめすなり」と記せり。今按に、

山槐記云「治承二年十一月十二日未二點。皇子天皇降誕云云。自二日隱間上轉餌云云。件紙自天原渡内無大炊命用之云云」とあり餌をおとすを腰氣コシクを下すよしにとり、大原を大腹に准へたるあやかりわざなるにや。但し本草綱目に餌集解、「主治下死胎」附方云。胎死腹中及衣不下者。取炊蔽戸前燒末水服即下などあるを見れば、其功能もある歟。

○あやつ 「やつ」を見よ。

○あやまち 元良親王御集「わすらるゝ身はわれからあやまちになしてだにこそおもひたえなめ」

○あやまり 神樂脇母古「わざもこにや一夜はだふれあいそあやまりにしより鳥もとられず、鳥もとらずや」

○あやまりじよもん むかしは息状といへり。西宮記には過狀とも見えたり。宇治拾遺には、詞しておこたりふみともあり。此事玉勝間にも出たれば省けり。

○あやむ 怪也。千載戀三「おきてゆく涙のかゝる草まくら露しけしとや人のあやめん」今のみのあゆみのつゆばかりさすがにてらすよひのいなづ

か人のあやぶることをあやむといへる。是にかよへり。此心なる歟。隆信集戀一「あやむばかりの」林葉集五「あやむとだにも同忍戀中等に見えたり。○あやめる 人など切るを人をあやめるといふ。西行集祝「千代ふべきものをさながらあやめてや君が齡の杖にとるべき」

○あゆぐ あゆがす 物の動くをあゆぐといひ、動搖すヨガフをあゆがすと云。是も古くよりいふ詞也。拾遺集物名に押年魚「はしたかの招餌にせんとかまへたる鼠弩マタギ」あゆがすなねすみとるべく此うたにあゆがすとよみたる則動搖すなり。又夫木十一秋藤原成忠朝臣「かるかやのほに出て物をいはねどもあゆぐ草葉にあはれとぞおもふ」

○あゆみつく 重之集「水ぐきのあとふみつけてこゝろみん思ふところにあゆみつくやと」

○あゆむ あよぶ 歩行をあるく。ありくなど云は常なれども、あゆむと云も古き詞也。古事記倭建命段に「然今吾足不得歩」また「衝御杖」稍云云新撰六帖一衣笠内大臣「たどりゆくみちのあゆみのつゆばかりさすがにてらすよひのいなづ

ま 夫木十三秋俊頼朝臣「吹風のあたりの雲をはらはせてひとりもあゆむよはの月かな」又此あゆむをあよぶといふも古きことなり。うたゝねの記に「これや桂の里人ならんと見ゆるにたゞあよびにあよびよりて、是は何人ぞ、あなこゝろう云云」

○あよぶ 「あゆむ」を見よ。

○あらかじめ 此あらかじめと云を、世俗にあらくにといふ意に云めるは、違へること也。雅言には豫字を訓て、かねてよりの意にのみいへり。こは打さゝれたる上にて、あらましの意と思ひよりてのひが事なるべし。万葉三十五に「いでゆく道しらませば豫妹アカシヤをとめん塞サキもおかましを」此外四五六等に出たる、皆かねてよりの意なり。

○あらがふ 古今六帖戀「あらがへば神もなくますよしあやしよそふる人のにくからなくに」後撰十一三藤原滋幹「ちはやぶる神引かけてちかひてし事もゆくしくあらがふなゆめ」和泉式部「神かけて君はあらがふたれかさはよるべにたてるみつといひけん」相模集「よさのうらにもしほ草をばかきつめてものあらがひはひろはざらなん」争交の意なるべ

し。俗言にはあらねども、今も専モハラいふ言ゆゑに引おく也。

○あらきかせにもあてぬ 清慎公集「たちよりてわれまづをらんをみなべし、あらきかせにもあてじと思ふを」

○あらくましき 後拾雜四「人してあらくましげにとはせて侍りければ云云」金葉雜上「いかる人ぞなど、あらくましげにとはせ侍りければ」

○あらそひはてのちぎりきばう 源平盛衰記に「梶原が事をそしりて、諂ひをはりのちぎりきのふせいなりとて、人々な口をつぐむ」と見ゆ。

○あらそふものはなかからとる 戰國策云「趙且伐燕。蘇代謂惠王曰。今日臣來過易水。蚌方出曝。而鴟啄其肉。蚌合而箝其喙。鴟曰。今日不雨。明日不雨。即有死蚌。蚌亦謂鴟曰。今日不出。明日不出。即有死鴟。鴟雨者不肯相舍。漁者得而并擒之。」とある、此ことわり常に多きこと也。軍士は更にもいはず、活業を勵まん人はよくよくおもふべきわざなり。

○あらだつ 千五百番歌合後鳥羽院宮内卿「神

な月夕日のかけになりにけりあらだちそむるおきつ  
しら波」砂石抄十二「武士等いかりあらだちて」  
○あらたむる 改也。續紀詔詞に「改め賜ひか  
へたまふ云々」此言あまた見ゆ。新撰六帖一信實朝  
臣「ちはやぶるう月のはじめあらためてきねがもろ  
聲はやうたふなり」夫木八夏、西行「水なしとき、  
てふりにしかつまたの池あらたむる五月雨のころ」  
○あらひほす 夫木廿六、入道前太政大臣「く  
れだけのよのまの雨にあらひほして朝日にさらす布  
引のたき」

○ありがたし 梨子を云。相模集「さかり過て、  
くちたるなしをおさなき人のもとにやるとて、たゞ  
ならじとて「おきかへし露ばかりなるなしなれど  
千代ありのみと人はいふなり」かへし「露にても  
おきかへてける心ざし猶ありのみと見るぞうれし  
き」

○ありがたし ありがたしとは、有ことの難し

きかたには、ありがたしといふめるは、いたく轉じ  
たる用ひぶり也。然れども是も今々の事にはあらず。  
然かうするべきさしさはやく見えたり。詞花雜下  
増基「あさな／鹿のしがらむ萩のえの末葉の露の  
ありがたの世や」金葉雜下、不輕の心を覺雅法師「あ  
りがたき法をひろめし聖にぞうらみし人もみちびか  
れける」拾玉四「法にあひて世にありがたきさとり  
ありこゝろにいひて人にかたらじ」山家集下「あり  
がたき人になりけるかひありてさとりもとむるこ  
ろあらなん」夫木卅四「万代を衣のいはにたゞみあ  
げてありがたくてぞ法はきゝける」竹取に「翁出て  
いはく、かたじけなくきたなげなる所に、年月をへ  
てものし給ふ事、ありがたくかしこまと申す」こ  
れらの中に今云所にやゝ近きもまじりたり。

○ありのぞとくにあつまりて東西にいそぐ 柳  
子厚云「蜂附蟻合」又「蟻アリ仁蟻草」文選「蟻同」  
「おなじ中將雅經の子をありきぞめにつかはしたる手  
本のつゝみがみに」增鏡老漫「八月御子の御ありきぞ

めとて、万里小路殿にわたらせ給ふ」

○あるにまかせよ 醉醒記云「世俗七字の口傳といひ傳ふる三事あり。「あるにまかせよ」「あるべきやうに」「身の程をしれ」以上三事也。中ごろある人、友どちのまげしき人のもとへよみておくれるうたに「あるときはあるにまかせてすぎてゆけ又なきときはなきにまかせよ」返し「あるときはあるにまかせてすぎしかど今なきときはえこそまかせね」

○あるばたけ 新撰六帖六信實「はりまなるしかまにつくるあるばたけいつあながちのこぞめをかみん」

○あるみるぢや 藍見茶也。或書云「藍見茶と云染色は、其はじめスミル茶といへり。そは松羅國の産の絹の色、皆此色に染て、舶來せし故の名也。是を京師の染屋に擬摸染出し後、海松の色とおもひ混へて、藍海松といひ出し歟。又常の茶に少し藍を見せたる様なる故に、藍見茶と心得たる歟。いづれも其よしありげなれど、松羅茶の轉訛なる事たしか也」

○あるよりいで、あるよりこし 万代集雜三大

僧正慈鎮「いにしへのあかよりもこき御代なれやしかまのかちの色を見るにも」異本拾玉「すべらぎの千とせをまつの春の色あかよりもこくそむこゝろかな」山家集「うぐひすの古巣よりたつほとゝぎすあらよりもこきこゑの色かな」

○あをざむらひ

あをにさい

明月記「嘉祿

二年六月六日或云爲強盜入父家青侍搦得見之家督也」太平記二、主上忍びて内裏を出させ給ふ條に「云云七大寺詣する京家の青侍などの、女性を具足したる體に見せて、御輿の前後に供奉したりける」同上「阿新事今まで只一人附そひたる青侍印本を相添

られて、遙々と佐渡國へぞ下しける」是は金勝院本なり青とは

青民草、青人草など古く云るは、なべての庶民を云て、おし並べたる心なるを、中昔の比、青女房、青侍など云は、なまくの上達部、なま女房などいへるなまに似て、若く未熟なる意と見えたり。則中右記に「青侍は未熟之義也」とあり。又今世に青二歳といふは、前髪の取はじめ、剃たる跡の青きもて云やうなれど、猶其むかしよりいひなれたる青なるべし。二さいとは鯰の二歳子より准へ云言なるべし。此魚

二歳三歳と年を経て行末は、とゞと云獸になるといふ事をよく世俗にものにたとへいへば也。

○あをぢ 青地なり。夫木十五秋周防内侍「いなり山すぎ戸のもみちきてみればたゞあをぢなるにしきなりけり」あかぢとよみたるもあれど、是に准へて省けり。

○あをなこな

青菜小菜也。今も青菜小菜賣と云。仁德天皇大御歌「山縣にまけるあをなもきび人とともにしつめばたぬしくもあるか」万葉十六に「蔓青堀川百首隆源「春くればかたみぬきいれしづのめがかきねのこなをつまぬ日ぞなき」

○あをにさい 「あをざむらひ」を見よ。

○あをばへ 苍蠅也。空穂さがのみんに「こひかなしひまちゆて、あをばへのあらんやうに、たちさりもせで、おはすれば云云」

○あをむ 夫木廿六橋能元「日をへつゝみつの

○あん 小豆の粉に砂糖を加へて練たるをいふ。甘粉の音便なるにや。一とせ遠國の順禮の女に、あん餅を與へけるに、是は甘粉の入たる也とてよろ

こびき。其國は聞もらしつるが、然か云國もあるにこそ。

○あんず あんに違はず 思案 御案じ被下間敷 今俗にうしろめたきを、あんじられるなど云是也。中務内侍日記に「ことのみあんせらるゝも云云」又「そらおそろしくあんせられて」竹取に

「これを此ころあんするに」源氏藤袴に「おとゞもさりや、かく人のおしはかりあんにおつる事もあらましかばと、いとくちをし云云」是にあんにといへるをおもふに、もとは詩歌文章などを案すと云より轉りたる言なるべし。今世にも案にたがはずなどいひ、又思案するなど云是也。又彼うしろめたきかたより御案事被下間敷など云詞も出たるなり。

○あんだ 今あんだと云駕籠あり。箇興の訛也。和名抄に「漢書註云箇興上音鞭和名阿美以太。編木爲興也」

○あんど 安堵也。小嶋口號に「たれもくあんとしたるやうに侍りし」文選檄蜀文季に「福同古人事流來裔百姓士民安堵樂業」漢書「高祖入關吏民安堵如故」

○あんない 俗にしるべするを案内といへり。其字も心得がたく、むげに卑き言のやうなるを、や、古き時より撰集にも家集にも、ないと多くいへるにつきておもふに、こは本其文字音にはあらで、あな、ひといふ古言の略るにやあらん續紀詔詞に「あなた、ひたすけて」また「あなた、ひ奉り輔奉り」又、「あなた、ひまつり相輔まつり」又、「あなた、ひ道びきまつりて」など多くいへる、皆俗に云案内に相近き詞どもなり。かゝれば古き歌の端書物語書等に、あないといへるは、此あなた、ひの略語なるを、案内の字を填て、假字も誤り來しにはあらじか。こは筆を執ながらふと思ひ出たる故に、記して後の定めをまつ也。

○あんに違はず 「あんず」を見よ。

○あんま はらとりのをんな はらとりの尼  
繁花物語布引に「おとゝなに泣。いたき所やある。はらとりの女にとらせよかし。われもさこそはすれと、おほせられければ」筑波問答に「はらとりの尼」とて、七八十になる連歌師もはべりきなどあるは、按腹の義にて、今も按摩とりなどいふが如し。枕冊

子寫本下十九丁に「はらとりのおんな」とあると合せて、右の繁花なるも、老女にて嫗なりけんを、假名におんなと書たるを、をんなとうつしあやまりて、女とはかける也。昔も女の年おいて、世のたづきなからんは、さるわざしてなりはひとせしもありしるべし。

○安樂 前漢書四十九「鼈錯傳。使先至者。安樂而不思故郷。後漢書卅七班超傳「李邑始到于寘云云。又盛毀超。擁愛妻。抱愛子。安樂外國。無内顧心」法華經四五百弟子受記品八「我昔欲令汝得安樂」

## い　ノ　部

○いういん 誘引也。後漢書五丁張魚傳「秋鮮卑復率八九千騎。入塞。誘引東羌。與共盟詛」

○いかいこと 物の多くあるをい。かいこと、云は、嚴重事の音便也。いかしは茂穂、嚴矛、重御世など、古くはあまたいへる語也。

○いがくり 苛栗也。夫木卅二雜、權僧正公朝刀おそろし」。

○いが

「おれ」を見よ。

○いが

「いら」を見よ。

○いかけ

いつかけ

世俗にはいつかけとも

云。沃懸也。

夫木四家集仲正「おもしろやかせのまきゑにふゝかれて庭のひまなき花のいかけち」職

人盡歌合七番まきゑ師「いかけちのところぐのきり

かねの光りことなる秋のよの月」義經記一十四「つき

けなる馬にいかけちの鞍おきて、大まだらのむかばき鞍渡して」

いかけのいもじは、沃意なり。枕草子に「そと立は

しりて白き水をいかけさせよといはぬに、しありく

さまの云々」菊花根合卷に「内の御にきびの事、な

ほおこたらせ給はねば云々。なほ水などいさせ給ひ

て」源氏真木柱に「さといかけ給ふ云々」など侍る

もみな同意。

○いかだをたゝむ

堀川百首、俊頬「大井川み

なはさかまく岩淵にたゝむ筏のすががたのよや」

○いかなるすぢ 後撰集春中、藤原師尹朝臣「あ

思ひよらまし」

○いかのぼり たこ 鳳巾また紙鳶ともかく。此物關西にてはいかといひ、關東にてはたこと云。和名抄に「辨色立成云。紙老鷗此間云師勞之以紙爲鷗形。乘風能飛。一云紙鳶」とあり。かゝれば昔

は鷗の形をもと、せしより、紙老鷗といひしならん。

今も鳶だこと云あり。其遺風歟。又かの上方にて是をいかともいかのぼりとも云は、後の製の形するめいかの如くなるより云歟。又東國にては、風烈しき故に顛倒させじとて、尻尾を附てのぼす状蛸に見立ていふにやあらん。通鑑、梁武帝紀「羊車兒作紙鷗。繫以長繩、寫勅於内、放以從風、冀達援軍、注卽紙鷗也、今俗謂紙鷗」。

○いがむ 一物の曲るをいがむと云。拾玉集四俳

諧「人ごゝろ神にたがはゝまろ竹のゆがまんかたを

ためて見よかし」

○いきどほる 神功紀、武内宿禰命歌に「あふ

みの海瀬田のわたりにかづく鳥目にし見えねば異枳廻倍呂之茂」方葉十九丁に「伊伎騰保流心のうちを思ひのべ云々」此言今世にては、憤怒の方にのみ

いひなせども、本は鬪悒と同語にて、心のむすば、

るゝをいへり。書紀に「無悒矣」をイキドホリナシとよみたり。悒は字書に「不安也」とも「憂也」とも註せらるにても知べし。但怒るも不安むすばゝる、一つにてはある也。

○いきみたま 生御魂、御祝儀とて今も專いはふ事也。親長卿日記曰「文明八年七月十一日參内。若宮御方以下有御祝之儀。いきみたま」東山殿年中行事「七月十一日、御所へに御參有て御生み玉へ、獻御申也。女中方之御事」閑窓和筆云『本朝の世俗七月になれば、生ける二親を供養して、生身魂と名づく。是も盂蘭盆の修行也。』  
益經云「願使現在父母壽命百年無病無一切苦惱之患」と。是七月僧自恣の日に、現在の父母の壽命長久をいのる發願の文也。是生身魂の修行也』といへる、此說よろし。鬼貫獨言下云「中元の日、蓮葉に飯をもり、鯖といふをに酢さし入て、生ける身をことぶき云々」今按に、蓮の飯は生身魂に預れるにはあらず。盂蘭盆に供する食也。師義記曰「貞治三年七月十五日。今日蓮葉飯有之」とあるが如し。

○いきやうく

史記晏子傳云「晏平仲策ニ駟

馬意氣揚々甚自得也」

古事記上「黃泉

戸喫」書紀、神代卷上「滄泉竈此云譽母都俳遇比」傳注曰「門とは卽竈の事也。戸字を書は竈を本にて、民戸をも然云故也。漢國にて民家を戸と云。故に此方にも民家を間と云に、此字を用るなり。さて竈を以て民家をよぶ事、今世の言にも幾竈と云、又竈が絶るなどと云めり。又民戸幾烟と云も此意なり。

○いくけぶり 「いくかまと」を見よ。  
○いくどうおん 善賢經云「異口同音教於行者清淨六根」

○いくなはのかま 斗なは 今世に釜の大小を云に、幾繩釜と云ことあり。宇治拾遺に「五石なはの釜を五つ六つかさもて來て、庭に杙とも打てずゑわたしたり」とあり。又米一斗ばかりいるべき釜を斗なはとも云り。言の意は之張のよし歟。水をいふるゝを水を張といへばなり。

○いくむかし 夫木六春、右京大夫「あせにけるすがたの池のかきつばたいくむかしをかへだてきぬらん」

○いけこひ 新撰六帖三「水ぶねにうきてひれ  
ふるいけごひのいのち侍間もせはしなのよや」

○いけす 篠也。袖中抄一二十「又いけすといふ  
事は池水中編竹籬養魚也と云々」新撰六帖三、知家

「世の中はよどのいけすのつなぎこひ身を心にもま  
かせやはする」夫木雜廿七源仲正「戀しなばこひもし  
ねかしなぞもかくこやのいけすになぶられてふる」  
和名抄「篠<sup>伊介</sup>」生簀又生洲の義にも有べし。

○いけどり 生捕也。万葉十六三十「韓國乃虎云  
神乎、生取爾八頭取持來」

○いさごにまじるこがね 夫木八夏、隆源「なが  
れゆく河邊にすだくほたるをばいさごにまじるこが  
ねとぞ見る」

○いさごにまじるたま 堀川百首、隆源「な  
がれゆく河べにすだく蟹をばいさごにまじる玉かと  
ぞ見る」

○いささせ 「さア〜」を見よ。

○いさばし 「魚あきなひする者を、いさば師と  
云。いさばはいさ魚場にて、魚捕獵場也。師は弓師、  
矢師などの師にて、爲の意也。さて其伊佐那<sup>イサナカ</sup>は、伊

は發語にて、潛魚と云こと也。雄略段、大御歌に「美  
那曾々久於美能袁登賣」とあるつゝきは、久の韵の  
字より呼連けたるが約れるにて、字於是食と約れり水潛  
魚と云つゝけなり。又武烈紀に「彌儼曾々雜思寐能  
和俱吾鳴」とあるも、水潛鮎と云つゝけにて、その  
意同じ。此等の曾々久にて、水中を經通ふを云こと  
を知べし。然るに此いさなてふ言に、万葉に鯨字を  
書るに泥みて、鯨の事とのみ人おもへども、鯨取淡  
海乃海など、湖水にも濱にも潜にもよみて、鯨はた  
やいさなてふに假たる字なる事、既に難語考初編一  
卷十一に粗弁じたるが如し。中昔後迄も此事はよく心  
得居たりと見て、中原集に「いさなとる夏の小川の  
鷺立汀」「あさせゆくいさなとるとや夢にさへ汀の鷺  
のねぶりたては」同鷺立河「打むれて鶴のゐる川  
のみなぎはにおのれさばしるいさなしら鷺」又同十  
一、春田鳥<sup>チ</sup>種おろす苗代水にある鷺のいさなとを  
もたつる里の子などよみたり。

○いしが 「いしく」を見よ。

○いしかみ 石神也。今も石神とて所々にあり

江戸より上方かけてあるは、多くは佛ぶりなりけれど、東北の國々に立けるは、皆古へぶりしたり。しかのみならず、其中にはたゞ何となく奇き御靈のあるにつきて、齋ひよつたりと云もこれかれきこゆ。按に、神名帳に、能登國羽咋郡大穴持像石神社。同國能登郡宿那彦神像石神社。大和國添上郡天乃石立神社。常陸國鹿島郡大洗磁前神社。同國那加郡酒列磯前神社。事は文德實錄八、齊衡三年十二月伊勢國石藥師の條に見ゆ。廿有餘の石神なり。の石像、また椿太大明神の石像の類と合せ考るに、多く大名持、少御神の御魂代なるべし。息長帶日賣命の御歌に「伊波多々湧石立瀬也湧久那美迦微能」とあり。

○いしく いしが云云 うひやつぢや 赤染衛門集四 「天王寺にまうで、云云「立ゐけるあとを見るこそかなしけれいし、やその世にあへらましかば」今昔物語九「何につけてもいしかりけるもの、上手かなと、皆人これをほめける」同十二「男は御門をはせて出で、洞院をくだりに飛がごとくにして逃さりぬ。院は此奴はいしかりける盜人かなと仰せられて、あながち御腹立もなかりけり」歸命本願抄に

「いしもさんげして」又「いしく云云」此外後世の軍書中にも見え、今の世の鄙土の言にものこれ。其が中にも、今下總葛飾郡幸手邊にて、幼稚者を呼んで、「いしが云云と云。此を又京近き國々にては、「うひやつぢやと云。此二つを合するに、いしくはうひしくにて、其本は初なる物を愛る方より轉りたる美賞言なるべし。神代紀一書に「國稚地稚」とあるを、クニイシツチイシと訓たるを、忌部正通口決に「稚字比志也」と云り。宇比は伊と約れ、ば也。是を見ればイシノトキと之を添たるは非なれども、猶是も一つの古訓なるべし。

○いだみ 艇也。金葉雜上上略「上にあたりけるを見て、たゞみをしかばやと女の申しければ、石だみしかれてはべりと申をき、て、皇后宮大貳「いだみありける物をきみに又しくものなしとおもひける哉」散木雜、返、俊頼「名にしおは、身もさえぬべし石だみかたしく袖に衣かさねよ」保憲女集に「心をふかき山に入て、みのをかけていのしのたたみに身をかけて」

○いしなご

なんご

手玉

兒女の遊び

に、手玉と云わざあり。是を東國のものなかにてなんごと云は、いしなごのいしを省きて、なごを音便になんごとは云也。手玉と云は、後に石を玉にかへて、圓く作れる物して取故に云なるべし。縣居雜錄云『築花月宴に「御もの忌などにて、つれぐなるにおば

しめさるる日などは、御前にめし出で、碁すぐろくうたせ、へんをつかせ、石などりをさせ御らんじ云云』右の繪に女房二人向ひて、一人の手の甲へ石ふたつのせ、下にも四つ五つちりてあり。然れば今之童の云、たんまとりと云もの也。たんまは玉とりを小兒の語にてたんまといふなりけり」とあり。今按に、拾遺雜賀に「東宮の石などりの石めしければ、三十一をつゝみて、一つに一もじをかきて參らせける」「こけむさばひろひもかへむさゝれ石のかすをみなとるよはひいくよぞ」玄々集、馬内侍「いしなどりのいしを中宮に奉りける人にかはりて「すべらぎのしりへの庭の石ぞこれおもふ心ありあゆるまでとれ」散木集、祝部「伊勢の齋宮に侍りける比、いしなどりのいしはせといふことせさせ給ひけるに云く」

○いそがし 空穂、祭使「男女かたわきて石はじきし給ふ」和名抄「彈琴一名指石」とある、此彈碁の類なり。今も碁盤にてもはじき、將棋の駒にてもはじく事あり。これをいしなどりと一つに心得たるはひが事也。

○いそがし 相模集に「いなづまのいそがしきを見て云々」海人手古良集「宮こく」とゆきかふ人の道をなみとしのせめてもいそがしき哉「頼政集「さみだれをまたばなへやおいぬべき水ひく田子のいそがしきかな」夫木十四、秋、前中納言定嗣「ゆめさむるゆかの下なるきりくす聲いそがはしあけぬこのよは」落窪一之上「かくおとなになり、わらはになり、いそがしきこゝちす云々」

○いそがばまはれ 行囊抄云方角抄云「山田の渡、矢橋の渡二所にあり。いづれも東近江なり。粟津のむかひなり。兩所の間十町ばかり。勢多のはしをあはづより見れば、野路より山田は北にあたるなり。此渡近シトイヘドモ可慎也。比良日枝廬ニアヒテ、覆ルアリ。古歌ニ「武士のやばせの渡り近くともいそがばまはれ勢多の長はし」

○いたききにしほをぬる 万葉五〔三十〕に「諺曰。痛術灌<sup>ニキ</sup>鹽<sup>ヲル</sup>。短材截<sup>ヲル</sup>端。此之謂也。」同歌云「いとのきていたき瘡には、から鹽をそゝぐちふがごと、ますくもみじかきものを、はしきるといひしが如く」

○いたゞき いたゞく 頭上を云。神代紀に

「醫經」万葉三〔四十〕に「伊奈太吉爾<sup>イナタヨリ</sup>きすめる玉は二つなし」空穗只<sup>コソ</sup>こそ「はゝ君はいたゞきの上を、はうらいの山になさんと云とも、たなそこのうらの内に、こがねの大とのをつくらんと云とも、たゞこそがいはん事はたかへじとやしなひ給ふ程に」堀川百首、仲實「としふればわがいたゞきにおく霜を草葉の上と何思ひけん」和名抄云「頂顛<sup>タケン</sup>。陸詞曰。顛訓伊太々岐<sup>タガ</sup>。頂也」とある、感をいたゞくと云も、頂きと云所へさゝぐる故に云。源順集に「天元二年十月の初の亥の日云々。銀にてゐのこかめのかたを作りてすゑさせ給へるにくははれる歌」「わたつ海の浮たる嶋をおふよりはうごきなき世をいたゞけや龜」

○いたづらごと 徒言也。小嶋口號「當座のいた

づらごとは中々に見ぐるしうて云云」又「かゝるいたづらごとをのみ思ひつゝけて」拾遺愚草員外二十「おいの後のいたづらごとかきつけ」とあるこれらは、自歌を卑下していへり。今俗によからぬわざするを云も、不用の方よりいふなれば、つひには一つ也。次と合すべし。

○いたづらもの 無用者也。うたゝねに「露ばかりおきもあがらずいたづらものにてふしたりしを」万代雜六「ひく人もなくてやみぬる桑まゆのいたづらものはわが身なりけり」是らは何のやくにもたゝぬものゝよし也。今も其意にもいひ、又此江戸にては、わろき事する者をも云。其もあましものゝ方より云て、詞は一つなり。

○いたぶる ゆする 人をいたぶるとも、ゆたぶるともいふは、振ひ動かすよしの詞也。そは同じ事をゆするともいひて、人の家々をゆたぶりめる惡者を名づけて、ゆすりと云に合せて、然か聞ゆ。万葉十四〔三十〕に「奈美乃保能伊多夫良思毛與」十一〔三十〕「風をいたみいた振浪の」

○いたむ 夫木十五秋後京極攝政「露むすぶ秋

の末にもなりぬればすその、草も風いたむなり」今  
痛入、また悼をいふなど云るも、是より出たる詞な  
り。

○いちえいいちらく  
變改。一槩一落是春秋」

菅家後草云「驛長莫驚時，  
世範云「一應親戚故舊」

○いちだいに名をうることかたし  
解云「名ニ一藝者無不庸」

韓退之進學

○いちがい  
坐燒而死。春秋大ノ之。取其不踰礼而行也。成功  
立事。豈是多哉。方指所言而取一槩焉爾」

○いちだん  
「たんく」を見よ。

○いちがい  
各在三天一涯。養生論云「爲稼干渴世者得一溉之  
功歟」

○いちにいで、わざはひをかふ。  
是は我がたよ  
りもとめて、殃災を招く事のあるを云也。雜譬喻經  
に此意を説くことあれど、甚長かれは得引す。

○いちにいちや  
中峯廣錄云「一日一夜萬死  
萬生」

○いちがんのかめうきにあふ  
涅槃經云「生  
人難。猶如大海中盲龜值浮木孔」菩薩處  
胎經云「盲龜值浮木孔」時々可值」圓覺經云「浮  
木盲龜難值遇云々」拾遺集「ながれ木も三とせあ  
りてぞあひ見てん世のうきにこそかへらさりけれ」

○いちにちのいのちは万金よりもおもし  
大智度論曰「設滿三世界寶無直身命」司馬遷報任  
少卿書曰「人固有一死。或重於泰山。或輕於鵠  
毛」

○いちげんはんく  
明心寶鑑云「一言半句重」

○いちさん  
値三千金」

○いちじのし  
一字師也。鼠璞云「僧齋已詠早梅詩云前村深雪裡。昨夜數枝開」鄭谷云「數枝非  
早也。未若一枝。齋已拜谷爲一字師」又韻府  
にも見えたり。

○いちねんてんにつうす  
參同契註云「精勤不  
懈退一念通天」

四十三

てゐるひとづまのあはでやみなんものにやはあらぬ」  
こは双六の一半を、市場と云よせたる也。今も博奕  
めきたるわざに此名ありて、ゐなかの人はいふめ  
り。

○いちばん 一番二番と次第して云是也。宇治  
拾遺物語に「奥の座の三番に居たる鬼とあり云々」

○いちふじにたかさんなすび 雅蓮醉狂集六云  
「吉夢を俗に、一富士二鷹三茄子と云とあり。何に  
よりていひ出たることか」爰埃隨筆三云、世人不盡

山を夢見るときは、吉瑞なりとて、一富士二鷹三茄  
子とて、同じく吉兆とす。或人云「此三物、夢の別  
にはあらず。みな駿州の名産の次第をいふことなり。  
富士はさらなり。二鷹は富士よりいづる鷹は、唐雅  
にてよきなり。こまがへりといふ。三茄子は此國第  
一に早く出す所の名産なれば也といへり」此説こと  
わりあるに似たり。猶可考。

○いちもち 逸物也。人にもいへり。言の意、  
實は一物なるべし。空穗、春日詣「舞人はとのばら  
の公達殿上人にか、御さんだちよりはじめて、よの中  
に名高きいちもちの物どもをなん」今昔廿五五「逸

物」同廿八三十「哀レ一物ヤ」並テ馬三

○いちもんぶち 一文不知也。土佐日記に「一

文字をだに不知るものしが、足は十文字にふみてぞあ  
そぶ」紫式部日記に「いちと云文字をだにかきわたし

侍らす。いとてづゝにあさましく侍り」

○いちやう 莊子云「一樣、文法」

○いちりいつちやう 一里一町也。此定和漢古

今のがひあり。徂菜の度量考、其外諸家の考に云  
る所一樣ならず。雜令に「凡度地五尺爲步。三百  
步爲里。蓋十分爲寸。十寸爲尺」と見えたり。並  
河五一の書るものに、其友犀水子と云る人、大和國法  
隆寺の什物にある古尺を見しに、今の銅尺に合すべ  
ば、二釐弱短きよしいへりとぞ。さらば皇朝の古へ  
も今と異同なき事知られたり。但かの什物なるは  
唐尺歟。此間の古尺は、今の鯨尺なりしかとおも  
ふよしあり。そは今の五尺が、曲尺六尺に當れば  
也。此事はよく考へ正して云べし。さて後の世と  
なりては、六尺を一步とし、六十步を一町とし、卅  
六町を一里とせり。こは六の數は陰數の中央なる  
を以て、地を度れる也。又其いにしへにも唐制に

據へる世には、六町を一里とせし事もあり。多賀城の古城の里數是にて、今も陸奥は此定めの遺れる所ありとぞ。故に是を京都西國邊にては、關東道とも云、又下道ともいへり。又或は五十町をもて一里とする所あり。是を伊勢道ともいへり。又安藝國などは、七十町を一里とすと云。又東國にても相模國鎌倉あたりは、猶五十町を用ふと云。さらば六町一里の積にすれば、一里は百九十一歩也。武備志に「日本名十里有百里者也」と見えたる、相遠からぬことなり。

○いぢる 「いろよ」を見よ。

○いつかど いかどの手際、いかどの身上など

云は、源氏物語に「ひとかどゆゑづけて」とも「ひとかど爲出で」などもいへる、一角を湯桶よみにいひなせる也。それを又「廉」と書ならひたるは、例の填字也。此言、文には常多かれど、うたにも稀にはあります。藤原長能集に。うちわたりの人に「しら波のよすればよれるさゝれ石のかどなきものはわが身なりけり」

○いつかけ 「いかけ」を見よ。

○いつきかしづく 空穂、俊蔵「あはれおほちおはせましかば、いかにいつきかしづきやしなひたまはまし」竹取に「いつきかしづきやしなふほどに云々」いつきは齋と同言、かしづきは冊字をよめり。かしこみつかふる義なるべし。傳字もよみたり。

○いつくしま 安藝國佐伯郡嚴島也。こはもと市寸島を訛れる也。古事記に、此大神の御名を「市寸嶋比賣命」とある是也。但式に、此神社を「安藝國云云。伊都伎島神社」とあるを思へば、はやくより轉じておひくに訛り來し也。

○いつくもない 詩人玉屑云「一語一句不<sub>イシニ</sub>苟<sub>イシニ</sub>作<sub>イシニ</sub>也」

○いつくわ いつくわはよけれども長くはたもたずなどいふ、いつくわは、本ひとはなどいふ詞を、音語に一花とはいひなしたるなり。興風集に、亭子院歌合、花櫻「わかの浦へいざかへりなん朝かほのひと花さくらうつろひにけり」

○いつこくいちじやう 一國一城也。禮記云「一國之人」涅槃經云「一村一城一國云云」今俗に心まことに物する事を、一國を云といひ、又安堵して大丈夫

なる事を、一國、一城と云などは、亂世後、國主城主と云ものゝ、國を擊取城を討取て、心まゝに物すめる方より出たる詞なるべし。

○いつさい 史記、李斯傳「請一切逐客。」○註索隱云。一切猶ニ例言盡逐之也。

○いつしう 後漢書云「光武手跡賜遠國皆札十行。細書成之。」

○いつしう 「周也。韻會云「十二年曰一紀。」取三歲星一周。」

○いつしき 國々に一色と書ていつしきといふ

地名多かり。こは東國にて海川の入こみたる砂地をすかといへり。すは洲、かは岡の加にて、陸と云に同じ。是に准るに、入洲陸の義なるを、世俗の急語に唱へて、いつしきとはいひつめたるならん。苗字にあるも、さる地より出たる名なり。

○いつしやう 一生也。漢書云「翟公大書其門曰。一死一生。廼如交臂。」新序云「出萬死不顧。一生。」

○いつしやうさんたん 一唱三歎也。禮記云「清廟之瑟。朱弦而疏越。一唱而三歎。」註云「一唱而三歎。」

○いつせうなき 二升泣 古事記上に「雉爲

歎。謂一人倡而三人和。」

○いつしよけむめい 古事談云「六條顯季與刑部義光新羅三郎相論所領地。白川法皇召顯季曰。雖無件庄汝不可事闕。彼一處懸命之由聞召云云。此事十訓抄にも見えたり。庭訓往來云「譜代相傳之久しきことなり。」

○いつしん 一心也。法華經七囑累品二十本今以付囑汝等。汝等應當一心。流布此法。廣今增益。

○いつしんふらん 阿彌陀經云「執持名號。一心不亂。」大和寶山記云「到祕密清淨本地一心。」

○いつせい 一世也。韻會云「三十年爲一世。」前漢書八十三薛宣傳「歸對妻子。一笑相樂斯亦可矣。」○註一笑謂一設酒肴請鄰里。一笑相樂斯亦可矣。○註一笑謂一爲歎笑耳。

哭女<sup>ナキ</sup>傳云『谷川氏云「嘗聞紀熊野。若家有死者、備<sup>ミ</sup>餽<sup>ミ</sup>舌<sup>ミ</sup>婆子<sup>ミ</sup>、令<sup>ミ</sup>之<sup>ミ</sup>哭<sup>ミ</sup>告<sup>ミ</sup>鄉黨。隨<sup>ミ</sup>價高低<sup>ミ</sup>有哭泣<sup>ミ</sup>」』といへる。此事は已も聞り。隨<sup>ミ</sup>價高低<sup>ミ</sup>とは、一升哭<sup>ミ</sup>二升哭<sup>ミ</sup>など云て定むとぞ。此風俗を聞て上代思ひやられたり』と云り。又或書云『安永の比、尾張國にも此事ありと云しを、今は絶たり。かゝる古代の遺風も、追々に失ひ來しこそ遺恨なれ。今は安房國、伊豆<sup>ミ</sup>嶋<sup>ミ</sup>にかつぐのこれり』とあり。

○いつせんぎり 一錢切也。むかしは髪結<sup>ミ</sup>をも一錢といひ、又罪人の首を斬る者を一錢切といひしとぞ。名物考云『或人云、室町家、豊臣家等の比には、髪結と云者錢壹文にてやとはれし也。此者は河原者にして、殊に賤き者なり。それに罪人の首をきらするを一錢切といひし。今世に乞食者にきらするが如し。又近比<sup>ミ</sup>越後國より來れる禪僧の何かの物語せしに、月額をいぢせんにすらせばやと云を、そは何者ぞと尋ねけるに、髪結の事也といへり。昔は錢の價貴とかりし故に、賤き者は一錢にてさるわさせし也』と云り。清正記に『豊太閣の清正に賜はりし高麗軍中の制札に、軍勢於味方地亂妨狼藉輩可爲一錢切』又信長記にも此言見ゆ。又上總國望他郡真間谷村に天寧山眞如寺といへる寺の、古き禁榜にも「門前百姓於非法有<sup>レバ</sup>之者可<sup>レバ</sup>爲一錢切一事」とあるよし、是らは斷罪といふ事歟。猶可<sup>レバ</sup>考。

○いつせんをしみのひやくしらず 佛說百喻經云『むかし商人、ある者に半錢をかしおき、久しうなりぬれどもかへさす。商人これを償らんとてゆくに道に大河ありければ、兩錢を出して人をやとひ、漸くわたりえて、かしこにゆきて見るに、錢をかりしもの他行してをらず。すべなくてかへるとて、又兩錢を出して人をやとひて、河をわたれり。半錢をとらんために四錢を失へり』とあり。是諺に似たり。

○いつぞや 一段也。唐史云『朱仁軌誨子弟曰。終<sup>レバ</sup>身<sup>ミ</sup>讓<sup>ミ</sup>畔<sup>ミ</sup>不<sup>レバ</sup>失<sup>ミ</sup>一段』

○いつたん にたん 絹布などを一反二反と云。台記に「布三反」また「布二反」などあり。其比既に端、段などを反と書しにこそ。

○いつち 一致也。易繫辭云『一致百慮』大玄經

云「百慮而一致」

○いつもやう 「いちり」を見よ。

○いつてういつせき 易云「非一朝一夕之故」

○いつとう 一等也。國語云「以班加等」

○いつひつ 一筆也。宋史云「張愛賓云。惟王獻之能爲一筆書」夫木廿一難藻壁門院小宰相「まれにだにあふ事かたきみちなりとひとふで見せよもじのせきもり」

○いつばんまつ 一本松也。古事記中、倭建命段に『到三坐尾津前一松之許先御食之時』云云「をはりにたいにむかへるを津の崎なるひとつまつあせを、ひとつ松人ありせば太刀はけましをきぬさせましをひとつ松あせを』万葉六四十に『登活道岡集一株松下飲歌』「一松いくよかへぬるふく風の聲のすめるはとしふのみかも』今世にも國々に一本松とて、山にも岡にも野中にも古木の松ある所多かり。遍歴手記と云書に云「諸國に一本松とて、兀山の嶺にも、一株の古松の殘れる處多きは、俗にも天狗の休所と云如く、悉く神木なるもの也。故に神靈是を助て、數百年千歳の後迄も、無難に風折雪折も

せで殘るなり。鄉民もし是を伐ときは、必ず災ひあり。よく心を用ひて助け有つべし。修行者行くれて、野宿せんにも、一本松あらば其下かけを頼みて床しむべし。災ある事なし云々」

○いづるいきひくいき 詞花集雜下「いづるいきいるをまつまもかたき世をおもひしるらん袖はいかにぞ」

○いでる 物の匂寒をいてるといふ。既に水りたるをもいへり。堀川百首、氷室、隆源「冬さむみいてし氷を埋めおきてはや氷室とはいふにぞ有ける」

○いでる 「でる」を見よ。

○いとこ いとさん をぢさま をばさま  
國によりて從父母兄弟ならぬ人をも親しみて、伊刀某と云所ありとぞ。八千矛神御歌に「伊刀古夜能伊毛能美許等」万葉十六二十に「伊刀古名兄乃君」神樂歌、猿波に「伊止己世仁。万伊止己世仁世牟也」風俗、知良歌に「伊止古世乃加止仁。天宇止乎比佐介天」などある、皆親睦ていへる詞也。言の本は勞しき子てふ語の省れるならんと、記傳にも引いて

へり。今京大坂邊の詞に、人の家の兒をいと様と稱するも、勞しき子てふ意の稱なるべし。又江戸にて伯叔ならぬ人をも、をちさまをばさまといふも、親み崇て云。其心ばへ似たり。

○いとこじる 「いとこに」を見よ。

○いとこに いとこじる 従弟汁也。常にも煮ことあれど、とりわきて二月八日十二月八日には、此汁を煮こと式の如し。此名心得がたかりしを、はやく田舎にありし比、ある家の婦人、今日はいとこ汁を參らすといひて、味噌汁の中へ小豆を入れたるをもてなせり。其名の故を問けるに、大豆にて製たる味噌もて、小豆を煮るゆゑ也、そは豆と豆となれば兄弟なれど、大豆とあづきとは從弟の如くなれば申す也。また此汁の中へにんじん、牛蒡等を入れて煮を、從弟煮と申すといひき。げに此意なるべし。料理物語に「いとこ煮は、あづき、牛蒡、芋、大根、豆腐、やきぐり、くわゐなど入、中みそにてよし。其品々をおひくに入てゐるによりて、いとこにとは云歟」とあり。こは追々に入て煮といふを、甥々に似るといふに云かけたる秀句ぶりにて、從弟とせる心なる

べけれども、却て婦人の言におとれり。又年々隨筆に、出雲國の神事のわざに引つけて云るは、あまりに迂遠なり。

○いとさん 「いとこ」を見よ。

○いとたて 薦を龜略に編たるを糸立と云は、糸かひのえひらより出たる名なるべし。中昔のほど迄は、糸かひするに萱を刈てかりに編て、そをえひちにして薺を作らせける也。催馬樂、走井に「はしりの、こがやからをさめ、それにこそまゆつくらせて、糸ひきなさめ」とある此こがやは、糸萱の謂也。散木集、春部に「伊勢國に侍るころ云々。かやをかりて、こがひするをりにえひらといふなるものにするを云々」とあり。此等合せて考ふべし。もしは糸しべに、糸を交て編故かとも思へど、糸は横に織りるれば、糸堅とはいひがたき歟。

○いとなむ 堀川院百首、修理大夫顯季「門松をいとなみたつるそのほどに春明がたに夜やなりねらん」常に經營とかきて、心をつけてもの爲るを云。俗に世話するといふ意につかへること多し。

○いとまごひ しのびね物語下「いとまごひし

給ふやうにて、御かほをつくぐと見給へば

○いなせ 伊勢集に「人のかすともせぬにそひ

て心ざしいとふかくありて、男ふみおこすれど、返りごともせざりければ「いなせともいひはなたれず

うきものは身を心ともせぬ世なりけり」後撰集十三戀

五「おやのまもりける女をいなともせともいひはな

てと申ければ「いなせとも云々同上」竹取物語に

「大伴大納言は、たつのくびの玉とりておはしたる

いなさもあらず云々」今是によりておもふに、せは

さの轉語、さは、しかの約にて、否歎然といふ言也。

○いなびかり 空穂、俊蔭「なみだをおとして

ながめわたる夕ぐれに、いなびかりのするを見て」

○いなを いなをの返事せよなどいふ是也。万葉

十一十七十四三又二十一等に「伊奈乎加毛」十六九に

「否藻諾藻はしきまにく」丁「不藻諾藻とのま

にく」源信明集に「いなともうとも」拾玉集に「な

やうやくともよみたり。此等の字乎の通ひは今世に、

諾ふ答を袁々とも、字々とも云、稱唯も字々とか

よひて同例なるが如し。古き歌に宇倍那と云

る字も同じ。

○犬神人 「つるめそ」を見よ。

○いねじ 「いんのこ」を見よ。

○いねたで 犬蓼也。夫木廿八難、爲家「から

きかななりもはやさぬいねたでのほになるほどにひ

く人やなき」

○いぬのくそ某 宇治拾遺五十六に「犬のくそ説

經といふぞ、犬は人の糞食て、くそをまる也。仲胤

か説法をとりて、此比の説經師はすれば、いぬのく

そ説經と云なりといひける」

○いねはこ 「いんのこ」を見よ。

○いねはりこ 「いんのこ」を見よ。

○いねふせき 「こまよせ」を見よ。

○いぬよけ 「こまよせ」を見よ。

○いねをこく 古今集雜上「かりてほす山田の

いねのこきたれてなきこそわれ秋のうければ」

○いのちくらべ 夫木卅六、源仲正「つるかめ

のいのちくらべのかちまけを君こそしらめ万代をへ

て」

○いのちながきははぢおほし 莊子天地篇「壽

則多辱」古今集春下「のこりなくちるぞめでたきさ

くら花ありて世の中はてのうければ

○いのちのぶる 拾遺集雜上「をしからぬいの  
ちや更にのびぬらんをはりのけぶりしむる野べにて」

○いのちはかせのまへのともしび

「阮瞻元日會親友曰。人生如風中燭」五車韻瑞云

林云「命如風中燭」

○いのちをこうもうよりもからんす

史記云

「燕丹言死輕於鴻毛」景行錄云「大丈夫用心剛

故死生於鴻毛」

○いはき 木石 万葉四十九「石木二毛成益物

乎」五七「伊波紀欲利奈利提志比等迦保憲女集」いへ

といへどさもうどきなきこゝろかな岩木よりだに出

る思ひを」伊勢物語六段「むかし男ありけり。女をと

かくいふ程に月日へにけり。いはきにしあらねばこ

ゝろぐるしとやおもひけん」行路難鮑昭「心非木石。豈無感」白氏文集「人非木石有情」

○いはしへも 夏秋の夕べに、魚鱗の如き白雲

の棚引ことあり。是を俗にいはし雲といふ。此雲顯

はるゝ時、三四日の内に必ず大雨ふる。故歌に水ま

さ雲とよめり。

爲忠朝臣百首「浪がたのみづまさ雲

にかげくれておぼろにみゆる月のふなかけ」夫木十

九、慈鎮和尚「するはれぬ水まさ雲にもる月もむな

しく雨の夜とやおもはん」千首、爲尹「夕立の水ま

さ雲のはやすみてすゝしくうかぶ三日月のかげ」

○いばしんゑむ 古歌に「ひかれなばあしき道

にも入のべし心のこまにたづなゆるすな」自鏡錄序

云「從意馬之害群任情猿之燭樹也」息心銘云

「識馬易奔。心猿難制」

○いはたおび 吳竹集一『いはた帶、纈帶と書

女のはらみて肌にする帶なり。五月と云に結なり「ひ

としひはだへにむすぶいはた帶心づくしの月をこ

そまで「あふ事はかたむすびするわざもこがいはた

の帶をいつかとくべき」と云を引たり。今按に、纈

纈は、ゆひはたなるを約めて、ゆはたとも云。今此

帶は胎内の子をいはひつゝしむ爲なれば、齋肌の意

なるべし。されば結機とは元より別也。又人しれぬ

の歌を、万葉としたれど、万葉にはなし。たゞ古歌也。

あふ事はの歌は、續後拾遺戀二、基俊の歌にて、四

の句やはたの紐とあり。然れば是は妊娠の帶にはあ

らず。纈纈なり。子玄子産論四卷に、鎌帶論あり。  
うけがひがたし。

○いはぬはいふにまさる 六帖五いはでおもふ  
「心には下ゆく水のわきかへりいはでおもふぞいふ  
にまさる」源氏、横笛「いはぬをもいふにまさる  
といひながらおしこめたるはくるしかりける」又同  
「ことに出でいはぬもいふにまさるとは人にはちた  
るけしきをぞしる」大和物語に『いはでと云鷹のう  
せけるよしを、大納言そさせられけるに、みかどと  
かくの仰ことはなくて「いはでおもふぞいふにまさ  
れる云々』

○いはゆる 空穂、藤原君「いはゆるあて宮ぞ  
かし」後拾遺序九葉「いはゆる大中臣よしのぶ、清原  
元輔、源順、紀時文、坂上望城等是也」所謂とかく  
字のごとく、もと所<sup>レ</sup>謂の意なるを、被<sup>ル</sup>射鹿をいや  
しのといふ古語のいひさまにゆるとはいへる也。  
されば世にいはゆるは、世に被<sup>ル</sup>言と心得べし。

○いはんや 伊勢物語に「まだわかければ、ふ  
みもをさくしからず。ことばもいひしらす。いは  
んやうたはよまざりければ」空穂藤原君に「いはん  
へたる也。相模集「すが原やふしみおさるのことぐ

やさばの人は、國王と聞ゆとも、おもむき給ひなん  
や」竹取「いはんやたつのくびの玉はいかゞとらん  
とまうしあへり」寶物集に「申さんや、十六丈をや。  
いはんや金銅をや」と、大佛のすぐれたるよしをい  
へり。やは反語にて、言んやは言には及ばずと云意  
なる事、申さんやはと云るに合せて知るべし。

○いひあはせ

後拾遺雜三、藤原國行「いたづ  
らになりぬる人のまたもあらばいひあはせてぞねを  
ばなかまし」詞花冬、惟宗隆頬「かせふけばならぬ  
かれ葉のそよく」といひあはせつゝいづち行らん」

○いひかたむる

今俗に、事を體に定るをかた  
むるといひ、又證文などの詞に、堅く相定とも、又  
物をいひつくるにも、堅く申渡すなど多く云ことな  
り。万葉十四<sub>(三)</sub>三十に「大舟を舳<sup>テ</sup>ゆも艤<sup>モ</sup>ゆもかためてし  
その里人」二十三十「ぬば玉のくるにくぎさしかため  
てし妹がこゝり」などよみたり。

○いひきる

しかとことをいひきる也。東鑑卅

二二「不可有御延引之旨。仰切訖」

○いひぐさ

古くは言種といひしを、となへか

さにうちなげかるゝことや何なる」源氏、桐壺「あさゆふのことぐさに、はねをならべ枝をかはさんと云々」

○いひたつる 拾遺集雜下、八條のおほいきみ「なきなのみ高尾の山といひたつる君はあたごのみねにやあるらん」

○いひつくる 謂囁也。空穂、たゞこそ「何事をいひけんとめをつけて見給へど、いひつくべきこともなし」是は枕冊子段「心ありと知たる人にいひつけたるに」是は万代神祇「鳥羽院御時、なき事を女にいひつけたるに」是は謡の隆信集下六丁「此事をよきやうにまうせといひつけたりし人のもとより」是は「云延也」

隆信集戀五「女のため

し日をいひのぶる」云延也「云移也。堀川百首、顯季「わがこひはからす羽にかくことはのうつきぬほどはしる人もなし」

○いひつべし 可謂也。文にはまゝ見ゆることなれど、歌にもあれば引なり。齋宮女御集「へだてけるけしきをみれば山ぶきの花こゝろともいひつ

べきかな

○いひわたす 「わたす」を見よ。

○いふがひない 伊勢物語に「女おやなくたよりなさまに、もろともにいふがひなくてあらんやはとて」藤原元真集「住よしの岸のしら波袖ひぢて今はいふかひなくぞ成ぬる」源氏物語には殊に多き詞なれど、事足ば省く也。(猶「かひな」を参照せよ)

○いぶる 火の燃かねて、けぶれるをいぶると云。大拔詞に「國津神波。高山之末。短山之末爾上坐氏。高山之伊穗理。短山之伊穗理平搔別氏。所聞食武」とある伊穗理も、山の霊氣を云なれば同じことなり。

○いへづくり 夫木廿七難、從二位行家「うらやまし軒端にかゝるさゝがにのさも事やすき家づくりかな」

○いへでする 繕紀、宣命に「家を出し人も」万葉十三十三「世間をうしと思ひて家出せしわれ」

○いへぬし 家主也。古くはやどもりといへり。堀川百首、右近權少將師時「梅花にはふ垣根の宿守は人よりさきに春をこそもれ」

似たるより云歟。古事記上に「如魚鱗所造之宮室」

空穂、藤原君に「いろこのごとくに造り重ねたるお

と」又梅花笠に「色々のあげはりをいろこのごと  
打渡して」などあり。かゝれば鱗葺といふことを省

きて云名歟。和名抄云「釋名云。屋脊曰臺崩反和名

伊良賀覆家屋也」

○いらつ いらん 今、ものにいらつと云は、  
歌に心いられとよむいられより出て、心の燃立煎る  
意なるを、音便にいらつとはいひなせるなり。古事  
記明宮段宇遲若郎子御歌に「いらなげくそこにおも

ひで」とある條の傳釋記傳卅三、に「いらは今世にも  
心のいらつと云に同じ」と云るは違へり。彼いらな

けくは、苛にて刺が如く、心の痛きよし也。今俗の  
證文詞に、違亂と書いて、いらんとよめる詞あり。字

も言もいと心得がたかりしに、大坂聞書と云書に「短  
慮違亂之行跡」とつけたる文を見れば、又此いら  
つの、つを音便にんと反たるに、違亂の字を填めた  
るならん。則短慮に燒煎立よし也。違はぬの假字に  
て、いとは別なれど、かなちがひの事は、俗字もとよ  
りわいだめなし。落窪物語一之下に「泣焦るれば、

つかふ人もやすからず見る」とあり。

○いらん 「いらつ」を見よ。

○いりえのみなみ 夫木十六冬、爲相「浪ゆる

き入江の南春に似て朝日の空ぞ冬のかげなき」

○いる 錢がいる。金がいるなど云うる也。小

右記に「供米千石許可入歟云々」空穂藤原君九丁に  
「わがためにちりばかりのわざすな。はらへすとも  
うちまきによねいるべし」源氏明石に、入道の詞に  
「かなぶみ見給ふるは、目のいとまいりて」などあ  
り。

○いれすみ 琐碎錄云「鯉魚膠ヲ墨ニスリテ身

ニサセバ、青黒ニシテ愛スベシ」

○いろ いろ事 いろをする いろ男 い

ろ女 男女通するを、いろになると云類の色は、  
もと中よく愛みする方より出たる詞也。そは物の色  
は美麗なるをいへば、中よく麗しみする方に云も同  
じ意也。されば物語書などに夫婦中のよきを、御中  
うるはしといへり。今世にも云こと也。古事記上に  
「我者愛友故弔來耳」神功紀に「善友」伊勢物  
語に「昔男いとうるはしき友ありけり」万葉十八十八

「字流波之美須礼」などある、是らに愛善等の字を訓る以も思ふべし。又此同意を、うつくしとも云り。古事記上に「<sup>ウツクシ</sup>愛我那邇妹命」愛我那勢命齊明紀に「子都俱之枳あがわかき子」孝德紀に「子都俱之伊母我」万葉三十五に「愛人」又廿三十に「有都久之波々爾」などよみたり。此等皆、中よくめでうつくしまる、よりいひて、其うるはし、うつくしを、物に比しては、即色合の艶ひ燃るが如くなれば、いろとはいふ也、中古の程にも「紫の色こき時は」とも「むらさきのゆかり」とも云る其心也。今は以ておもふに、母をいろは、妹をいろも、兄をいろせ、弟をいろと、姉をいろね、など云も、愛みて云稱也。此に二つの意あるべし。其一には、繼母などに對へてうみの母をば、別て、いろはといひ、庶兄庶弟に對て同胞なるを、別て、いろせ、いろと、親しみて云もあるべく、又たゞ親しみ愛みて云るも有けん。又いらつ子、いらつめ、入彦、入姫などのいら、いりも、既に記傳に云るが如く、伊呂を轉じて云るなれば、本は皆親み言也。然れば今俗に、色になると云も、即親しくなる也。又色をする、いろ女などいふは、

歌よみする、酒のみするなど云如く、體言になして云ふにぞある。万葉十六二十七丁に「伊呂雅世流菅笠小笠。吾宇奈雅流珠乃七條。取替毛將申物乎」とあるを見れば、はやく當時戀人を伊呂と云る也。略解に此呂字を毛の誤りとせれど猥に改むべきにあらず。○いろくづ もと鱗の名也。和名抄に「唐韻云。鱗魚甲也。文字集略云。龍魚之屬衣曰鱗、和名以呂久都。俗之伊呂古」とあり。されば魚を指していろこと云は、鳥を翅といふ類の詞也。

○いろは 「いろ」を見よ。

○いろは 是を童子の手習始に習はせしも久しき事也。台記「久安六年正月十二日。今日今麻呂參御前テ勅書ニ以呂波ニ云云」とある、此今麻呂は隆長卿の童名也。

さて此いろはうたの事につきて、いろくづへども、皆無稽の強奏のみ。古き說は河海抄十二、梅枝卷に引江談抄云る說いと委し、こゝはさる謬妄を云にあらず。童子に習はしめたるを云のみなれば、考へおける事もあれど記さす。

○いろふ いぢる 源氏松風に「惟光朝臣れいのしのぶるみちは、いつとなくいろひつかうまつ

る人なれば」徒然草上七十七段に「世中に、其ころ人のもてあつかひぐるにいひあへる事いろふべきにはあらぬ人の、よく案内しりて、人にもかたりきかせ、とひきいたるこそうけられね」とある、これらのいろふは、其ことにかゝらひ、口を出す事なるを、今の俗に、物に手を出す事を、いろふといふは轉じたる也。江戸にていちるといふ、こは別語歟、訛れる歟。さてかのいろふと云に、綺字ヒガタを用ひ習へるは借字也。

東鑑六「可レ令レ停ニ止地頭ヒラフ」綺ヒガタ 尺素往來に「國衙分所務任ニ先規レ不レ可ニ相續ハシラフ」云々

○いろふし 空穂、藤原君四十「かくて此てらにはけふのいろふしにてけしからぬ事多かり」

○いろめく 夫木十四、秋、從三位爲實卿、「やへむぐらかどさすまでも色めくはきくこそ草のあるじなりけれ」

○いろをする 「いろ」を見よ。

○いろ男 「いろ」を見よ。

○いろ女 「いろ」を見よ。

○いをのめ 「いば」を見よ。

○いん 印也。台記久安六年條に「仰ヤハニ文章博士

茂明朝臣ヘシム勸ヘシム印字様ヒヂマツ。是賴字古文也。用名上字レ例也。云云。印ヒ以銅鑄ヒツヤウ之方一寸九分。高一寸八分。壺以銅鑄ヒツヤウ之。其形如小桶。身、口徑三寸七分。指ナ牙アハ下アシ言ヒツヤウ之。深一寸七分。蓋口徑同身。深三分。

○いんえん 因縁也。此字多くは佛書に見えたれども、そのもとは後漢書より出たり。この類の事常多し。されども其用ひざまはおのづから意異なり。後漢書廿六陳寵傳、「轉爲辭曹。掌天下獄詔。其所平決無不服衆心。時司徒辭訟。久者數十年。事類溷錯。易爲輕重。不良吏得生因縁」○註因縁謂依附以生輕重之。」

○いんか 印可也。維摩經二、弟子品三「若能如是坐者。佛所印可。注肇曰。此平等法坐。佛研印可。豈若仁者有待之坐乎。」

○いんかん 萬代集一「座主辯申とて、印鑑おり侍りける時よめる」とある、こはもし印鑰か。

○いんぢ 小ちうち ないち 和歌秘

抄云「曉月のしはすのはてのそらいんち年こえわび  
ぬ石ひとつたべ」定家卿返し「さだ家がちからのは  
どを見せんとて石をふたつにわりてこそやれ」とあ  
るいんちは飛礫を抛る事也。此わざむかしさいたく  
行はれて、五月五日には殊に其日の式の様にせし事  
とぞ。年中行事繪卷物の圖を見るに、五月五日の條  
に出たり。その状七八歳より十五六歳までの童、各  
二三尺の木竹の中を割り、小石を挿て、平地よりも  
打、樹上にのばりても打たり。義經記二、鬼一法眼  
の條に「弟二人家にあり。かはやと申所にいんちの  
大將して御入候云々」同四、堀川夜討の所に「土佐  
が勢百騎、白川のいんち五十人あひかたらひ、京の  
案内者として、十月十七日丑刻ばかりに、六條堀川に  
おしよせたり」北條九代記十甲乙人等印地停止條云  
「文永三年四月廿一日、鎌倉内外の甲乙人等數十人、  
比企谷の山麓に群集し、未尅の比よりして向ひ、飛  
礫を打けるほどに、所々の盜者とも兩方に行集ひ、  
意恨もなく怨もなくて、多陳を分ち、初にはたゞ飛  
礫を打合、漸く人數の重るにまかせ、互に矢を放ち、  
是に中りて死傷する者兩陳にあまた出来ければ云

々。童部どもの小石をなげて印地するだによろしか  
らず。鎌倉あたりには古今いまだ如此事なし」此外疊  
河原印地。平家物語に向へ櫛印地。武德安民記廿、名義は石擊  
の音便にやあらん。片岡氏云、今も駿河國にては正  
月にいるといんち打とて子供大勢つどひて、左右に  
わかれをりて、石うちすと。我友岡邊知直が駿河に  
仕し比、まのあたり見たりと云りといへり。さてあ  
ないちといふも、穴いんちのよしか。但し是は穴を  
目當にうつなれば、穴打轉じて云か、さだめがたし。

○いんちうち

「いんち」を見よ。

○いんのう

「ふぐり」を見よ。

○いんのこいのこ

宿直犬

犬笞

犬張子

犬字

猶犬

小兒のおびえたる時、いんのこ  
くといひてなで抑る事のあるは、犬はよく物の氣  
を退け、魔を避る物なれば也。即犬の子と云を音便  
にいんのこととはいふなり。さればよくおびゆる兒に  
は、犬の字をかきて寐さするは、まじなひ也。又夜  
のとよには宿直の犬をおき、又其弄び物にもおい  
ぬ、犬箱、犬張子などある、皆守護のためなり。室  
町殿御産所調度之中、御犬官二つと見ゆ。小笠原家

傳云「宿直の犬一對、男は左向を第一に用る事にて守を入れ也。右向には何にても斎物を入れべし。女は右向に化粧の道具を入れ也。宿直の犬なき方は、額に犬の字を色書にする也」又云「宿直の犬を用る事、犬はよく玉ばこの道をしり、野干魔物を拂ふ故に、幼き者に用る也。昔時日本武尊東夷を討征し給しとき、道するべの犬有て、功をなし給ふ。其故に熱田御社内に御犬の祠とて有と云云」とあり。實に犬の道するべする事は、山中廣野にてしらぬ社へ詣んとする時など、何方となく出來て導く事ある、誰も思ひ合すべきものぞ。又導きはつればいつとなくかへりさりなどする、いとあやしきものにぞある。けだし幽冥に通する所ならん。神社の前に狛犬をおくも、さるやうこそあらめ。獅子を用るも同じことなり。

○いんろう 印籠は魚袋の遺風にて、古への印匣也。むかしは官印をば常に腰に帶し故、匣を作りたるを魚袋と云。また印匣ともいへり。然るに後世いつとなく、たゞ藥合の如く用ひならひたり。通鑑、僖宗紀註、古者授レ官賜ニ印綬一常佩ニ之於身一至レ解

「官則解ニ印綬一至ニ唐一始ニ置職印一任ニ其職一者。傳而用之。其印盛レ之以匣。當官賓ニ之臥内一別爲ニ一牌。使之掌レ之。以謹出入。印出而牌入。牌出則印入。故謂之牌印ニ。揮塵錄一宋宰相入レ省。必先以秤。秤印匣」

## うノ部

○う一 うめく うなる うむ 人の疲れたる時、又は寐たる時などに發する音也。字韵は五十音の中央の音なる故に、甚いで安くして、口のみならず鼻よりもおのづからによく出。されば其おのづからに出る音を名づけて「うめく」「うなる」「うだく」などはいへり。そもそも如此出安き音なる故に、物を安く呑鳥を鶉と云、又口より子を吐獸を兎とはいふなるべし。婦人の産するをうむと云も此故也。和訓榮曰「兎はうとばかりも云。吐而生子といへば、易産の意にて名づくるにや。鶉鶉をよむも產の義也。されど胎生にて口中より吐と云は謬也。雛を吐は鶉也といへり」今按に、鶉鶉を呑ば尻より出。子も又其如くかやすく産むるゑに、字の音の名とはなれるにこそ。

○うかく 浮々なり。さよのねざめに、「男も女もうかくしからず。正直に道理をしりたらんよ」沙石集に「うかく」と物にうかれて行過ぬるほどに云々

○うかくふ 曾禰好忠集十一月上「やぶかくれん」

きくすのありかうかくふとあやなく冬の野にやたはれん」

○うから やから 神代紀に「宇我遷」と云訓注あり。是によらば我もじゆるか。登母賀良と云は。今も濁れり。されど波良賀良は、昔も今も清て云やうなれば、かゝる語は其つさによりてかはるべし。さてうからとやからとは、差ありて、なきが如し。

○うけたるさけ ひきうけくのむ 人より盃をさゝれて飲を、酒をうくるといふ、うけなり。字唐韻云。擊<sup>ヒツ</sup>今按一字兩訓。在<sup>アリ</sup>鷹<sup>タカ</sup>阿之乎。在<sup>アリ</sup>犬岐豆奈。所以綏<sup>スル</sup>鷹<sup>タカ</sup>狗<sup>イヌ</sup>とある。此綏撃の離れがたく解がたきを世のはだしに譬へて云也。

○うごく うごつく うごむし うづくま  
群て進退自由ならざる方よりうつりたるなるべし。  
族、やからは家族か。又祖族の略歟。然らば互に相似たる言なれば、字も又相通はして訓ならひ來しにぞあらん。

○うかれめ 空穂、藤原君四十<sup>三丁</sup>「あて宮の御ことおそばすきくとて、河のほとりにゐたまへり。君達

の御前にうかれめ廿人ばかり、ことひき歌うたひて、御ぞ給はれり」

○うきよのかせ 夫木十九、後京極攝政「はかなくも花のさかりをおもふかなうき世のかせはやむ時もなし」

○うきよのきづな 和名抄云「練<sup>スルナ</sup>」文選西京賦云。韓盧噬<sup>ハヌシ</sup>於<sup>ミサクニ</sup>練<sup>スルナ</sup>末<sup>スルナ</sup>訓岐豆奈<sup>ハヌシ</sup>反薛綜曰。練學也。また「學唐韻云。擊<sup>ヒツ</sup>今按一字兩訓。在<sup>アリ</sup>鷹<sup>タカ</sup>阿之乎。在<sup>アリ</sup>犬岐豆奈。所以綏<sup>スル</sup>鷹<sup>タカ</sup>狗<sup>イヌ</sup>」とある。此綏撃の離れがたく解がたきを世のはだしに譬へて云也。

○うけたるさけ ひきうけくのむ 人より盃をさゝれて飲を、酒をうくるといふ、うけなり。字治拾遺三丁<sup>二</sup>「そのうけたる酒を家あるじのかしらよりうちかけて云々」又同三丁「ひきうけくのむ云々」

○うごく うごつく うごむし うづくま  
群て進退自由ならざる方よりうつりたるなるべし。  
祝詞式、新年祭詞に「集侍神主祝部等云々」大祓詞に「集侍親王諸王諸臣百官人等云々」貞

觀儀式に、大祓處に「參集説曰「未爲字古那波禮留」などある則此字許なり。又蹲居をうづくまと云も、其形容を准云なるべし。猶下のうづまさの條考へ合すべし。

○うしにこときかする 明心寶鑑云「四皓謂子房曰向獸彈琴徒盡其聲」

○うしのけまん 元和七年都詣記と云物に云、「嵯峨清涼寺の牛の華蔓を拜む云云。これは安嘉門院の御車の牛にて、御龍愛のあつかりしによりて、うせにし後其眞影を華蔓にうつされて、菩提を弔はせ給へるなり云云」とあり。是まことに然るべし。

駿牛繪詞云「唐庇名也は安嘉門院の御牛、北白川そだちなり。せいも大きに容儀もたぐひなきほどの上牛也。女院御秘藏の次第のべ盡しがたきものなり。眞影を花蔓にうつされて、清涼寺の本尊の帳にかけて今にあり。唐庇は牛の名なり」と見えたり。和漢三才圖會七十二末「愛宕山清涼寺云云。牛華暢安嘉門院御車牛名唐肥大美毛。而女院最所愛。寫其牛像於華暢掛清涼寺本尊之帳」見駿牛繪詞按。牛死哀悼之餘寫其形。吊苦提矣。然好事者立異說。示因

果恐忘誕也。女院不幸耳」山岡氏名物考云「常憲院様御代に、桂昌院殿の御願にて、初て江戸へ本尊下向ましくて。後護國院にて開帳ありと云。其時に新寫の畫像并に調度等御寄附有といふ。其後享保の中頃に又回向院にて開帳あり。是二度目の時也。老人の話に云。其時の尊像は四尺五寸ありきと云。其外靈寶物はなし。羅漢の畫像もなし。牛の華蔓のみありと云。其時の縁起を見るに、今のと大に異なり。今のは其後にいつはれるものなり云云」此外釋迦二軀ありて、二軀共に宋時作佛なりよし、宋史を引て委々弁じたれども、此に用なき事どもなれば省さつ。今是らを合せ見るに、彼牛華蔓の縁起の旨は、享保年中より後に作り出たるならん。その比の人は質朴なりし故に、さる事に耳うとみもせず、嵯峨の開帳といへば、殊の外に群集せしよしなるを、此近き天保七年回向院にて開帳せしほどは、心あるも心なきも、またのあたり天位を恐れず、やむ事なき御尊母の、牛にならせ給ふなどいふ事を口々にかしこみて、惡み言ふさまなりき。これによりて却て衆人の信をうしなひし故にや有けん。參詣もいとすくなきさびしかりき。わづかの年序に、かく人情のなり來しも。

偏に皇朝の學びの明らかになりて、庶民にいたるまで本つまことに立かへる故にぞあらん。これにつけてもかたじけなくたふとくたのもしき大御代になん。

○うしの角を蜂がさすともおもはぬ

會元云

「皇州根慶院道匡禪師曰。蚊子上鐵牛無汝下舊處」語同禪家龜鑑云「如蚊子上鐵牛下舊不得處

棄命」

○うしは牛づれうまは馬づれ

列女傳云「齊王

曰。夫牛鳴而馬不應。非不聞也。異類故也」

誠齋雜記云「韓憑爲宋王舍人。妻何氏美。王欲之捕。舍人築青陵臺。何氏作鵲歌。歌曰。烏鵲雙飛。不樂宋王。」

鳳凰。妾是庶人。不樂宋王。」

○うしみつ

丑三也。中古の書に「子一つ丑三」

など云る事多し。こは一時を四つに分て、其一二三

を云也。されば子四つ丑四つと迄は云ることもあれ

ど、五つと云數はなし。さるを俗に丑みつと云を、

丑満とも心得、又たゞ子剋丑剋と云こと、おもふな

どはひが事也。拾遺連歌に上「うしみつと時申ける

をきゝて、女のいひつかはしける「人心うしみつ今

はたのまじよ」宗真「ゆめに見ゆやとねを過にける」

大和物 空穗、藏開「うしみつ」林葉集、乍臥無實戀

「うしみつは過ぬるまでになづさへどまだ何ごとも

かたちはできぬ」公事根源物名「佛名の中の夜など大

將のとのゐ申あり。弓場にて丑一のほど、大將たづ

ねゆき給ふ」雲圖抄裏書「初夜自亥一刻至子子

二刻。後夜自子三刻至子丑四刻」夫木六春「を

しめどもうしみつ今は更る夜のたゞゆめばかりのこ

る春かな」

伊勢物語に「子ひとつより丑みつまで有に」

○うしろ 一 夫木十二、顯仲「谷ふかみうしの

の田ゐにいもりしてまれにぞたてるひづちほの稻」

○うすやみ 一 夫木十三秋、隆信朝臣イ隆源法師「野

べの色はみなうすすみに成にけりしばしと見つる夕

ざりの空」

○うすぶき 一 夫木十六冬、權中納言師俊「さも

こそはまやのすきぶきうすからめもるばかりにもう

つ時雨哉」

○うすもえき 一 夫木七夏、隆信朝臣「おもかけ

はしごれし秋のもみぢにてうすもえぎなる神なびの  
もり」又同卷、爲頼朝臣「おひにけるにはのもえぎ  
のこぐらきもそこはかとなき涙とまらで」もえぎは  
崩黄カキイモにて、新葉の初て崩出たる所の色をいふなり。

○うすらぐ 曾禰好忠集「かものゐる入江の水

うすらぎて底のみくづもあらはれにけり」

○うた 井蛙抄異本云「故宗匠、  
續千載集をうけ給て被撰しとき、さして歌よみにも

あるも皆憂疊有の義なる事難語考にいへり。  
○うたながめ 「ほそめ」を見よ。

○うたはひとによらず 井蛙抄異本云「故宗匠、  
續千載集をうけ給て被撰しとき、さして歌よみにも  
あらざる人の來にも、勅撰こそ候へ、御歌や候、出  
させ給へと申されしを、故戸部其外の門弟、勅撰は  
道の重事、秀逸を可く被撰事なり。分明に歌もよま  
ぬものに歌をこはるゝ事、人難も有ぬべき事なり。

○うたてし うた、京あたりの人の今も  
「うたてや」「うたてい事ちや」など云めるさま、憂  
の意ありて、笑止やと云にもかよへり。古今集上「ち  
ると見てあるべき物を梅の花うたてにはひの袖にと  
まれる」同戀「あはれてふ言こそうたて世中をおも  
ひはなれぬほだしなりけれ」貫之集中、蟻通神の事  
を「うたてある神なり云々」又古今、俳諧に「花と  
見てをらんとすればをみなへしうた、あるさまの名  
にこそ有けれ」これら何れも憂の意を帶て、今云所

然るべからずのよし、つぶやき申されしを、かへり  
きかれて、予に對面の時、仰られしは、うたは此國  
の風俗なり。國にうまれたるもの、たれかよまざら  
ん。稽古して世にしられたるものあり。獨吟して心を  
養ふものもあり。よき歌のいでくる事、歌よみなら  
ぬものもよみ出して、ふるき集にも入たり。後撰の  
八つ子が類なり。勅撰を承て、ひろくよき歌もとめ  
ん時、名譽なき人もいかなる秀逸をか詠じもちたら  
ん。などか相ふれで有べきと申されし。かへす

く面白覺え侍りき云々とあり。おもふに、歌事をとする人は、よまでありぬべき事をもつくりてよむ故に、其數こそはおほかれ、まことに誠情を盡すさかひに至りては、事とする人もせざる人も、多くのたがひは有まじきにこそ。

○うたびと うたよみ 萬葉十六丁に「歌人跡和乎召良米夜」夫木六春「うた人のかざしやをりてとめけんみたらし川の山ぶきの花」又後拾遺のはし書に「うたよみにめしとられて云々」此外歌合にこれかれ見ゆ。こは作者の人数にあづかれるを云なれど、言は猶同じきなり。

○うたまだら 歌曼陀羅也。續詞花集七、左京のかみ顯輔「和歌曼陀羅といふもののかきて供養しける日、法華のうた、人によませけるに、無量壽經をよめる云々」

○うたよみ 「うたびと」を見よ。

○うたよみする 今世のるなか人、又兒女等の言に歌よむといふことを、うたよみすると云めるは却て古語也。こは酒を盛をさかもりする、手を拍上をうたげするといふ類のいひさま也。書紀、神武御

卷に「爲御謡之。謡此云多預瀬」とあり。枕冊子にも「うたよみしておこせたる」とあり。

○うたをうたふ 竹取物語に「あるはふえをふき、あるはうたをうたひ」

○うち 家を指てうちと云。内を云も又同じ。

陸信集に哀傷「ひとつうちなれど、ふみにかきつけていひつかはしたるを云々」土佐日記の終に「ひとつ家の如くなれば」といふ文も、一本にはひとつうちとあり。

○うちかけ 紀略「康保二年五月廿四日發已。

行幸朱雀院有競馬騎射。左右近衛射者各十八人。著打懸。帶刀四人。著小松摺衫。讚岐日記「あるは錦のうちかけ」嚴島詣記「袖口ほそくすそひろきうちかけといふものを云々」和名抄云「襦兩襦衣名也。釋名云。兩襦。今按兩或作襦。和名字知加介」と見えたり。今俗に云處は、たゞ表に打懸るを以て云也。

○うちかた 内方にて、人の妻を云。貴之集に「つねすけの中納言内方」とあり。古き言なり。

○うちがひ 旅行人の上帶をうちがひといひ、又足継ふものにも此名有。打ちがひの意にて、左右

より打ちかはする故に云也。萬葉十四二十に「から衣湊蘇乃字知可倍あはねどもけしき心をあがもはなくに」同或本に「から衣湊素能字知可比あはなへばねなへのからにことたかりつも」

○うちがみ

紀貫之集に「まつるとさきもあふかな卯花は猶氏神の花にぞありける」こはおのくの氏の祖神を云。たとへば藤原氏にては春日神を申せるが如し。今俗の産神と混じて云はひが事也。

○うちぐり

今うち栗と云物は、むかしは平栗と云けん。延喜式に平栗と云名見えたたり。

○うちしき 源氏、繪合に「うちしきは青地のこまのにしき」空穂、俊蔭下「しん殿の南のひさしおましよそはすうちしきしとねみなあたらしくせられたり」

○うちでのこづち 空穂、俊蔭上に、俊蔭波斯國に至り、阿修羅があづかれる寶の木を乞るゝをい

へる所に、アス<sup>フ詞</sup>此木の上中下かみなかのしなは、大福德の木也。一すんをもちてむなしきつちをたゞくに、一萬恒河沙のたからわき出べき木也云云」平家

物語、祇園女御段に「これぞ誠の鬼とおぼゆる手にもちたるものは、聞ゆる打出の小槌なるべし」盛衰記卷廿六にも、此打出の小槌の事見えたり。康頬の寶物集卷一云「されば人の寶には打出の小槌といふものこそ、能寶にて侍りけれ。廣野に出て居、よからん家や、面白からん妻男や、遣能からん從者、馬牛、食物、衣物など心に任て打出してあらんこそ中暑よく侍るべけれと云に、又人傍より指出て云やうは、打出の小槌は目出度寶にてあれども、口惜き事は、物を打出して樂しくて居たる程に、鐘の聲をだに聞つれば、打出したるもの、皆こそくと失る事の侍るなり。されば目出度て居たると思へども、左様の時は、廣き野中に只獨裸にて居たらんこそ、あさましかるべきれ中暑昔より隱蓑の少將と申す物語もあるまじき事を作て侍ることを承れ云々

○うちとけぶみ 紫式部集に「故少將の君のかき給へるうちとけぶみの」

○うちなくて玉のこし 陳侯長恨歌傳「當時謠詠有云。生女勿悲酸。生男勿歡喜」又曰「男不封侯。女作妃。君看女却爲門楣」源氏帝木に「中の品とい

へとも云々。おもひよらぬさいはひ取いづるためし  
も多かり

○うちにいる 今俗に數に入と云ことを、うち  
に入といふことあり。金葉集別離、藤原有定「こひ  
しさは其人かすにあらずともみやこをしのぶうち  
いれなん」

○うちはてらく外はしらく 児童のなぞと  
いふ諺に、行燈を「内はてらく外はしらく何に」といふことあり。古事記上、黄泉國の鼠の言に「内  
者富良富良。外者渕夫渕夫」とあるによく似たり。

○うち火 「むかひ火」を見よ。  
○うちふす 安法法師「ついたち春たつごも  
りの夜「暮はつるとしをしみかねうちふさば夢みん  
ほどに春は來ぬべし」

○うちまき 今も米をうちまきと云是也。空穂  
藤原君「二十」はらへすともうちまきによねいるべし。  
もみてたねとなさば多くなるべし」同あて宮、春

日詣の末に錯入「ものまわりうちまきしたり」子うま  
れ給ひし宮まる源氏横笛「うちまさしからなどして、  
みだりがはしさに」孟云。なき子のおび 大殿祭詞云  
「屋船久々能遅命。屋船豊宇氣姫命登俗謂宇賀能美多  
麻今世產屬以辟木束稻置於月邊乃以米散屋中之類也」  
とある古きならはしより云つたへたる也。今は四十  
年許以前、異國へ吹流された漂泊船の物語に、米  
をまさきて大き難を遁れたる事ども記せしを見れば、  
貴き神習ひなるべし。今昔物語十四、散米して鬼の  
退し事を云る所に「ウチマキノ米ヲツカンデ投カケ  
ルニ、此ワタル物ドモ、サトウセニケリ」とも見え  
たり。

○うちやげ 手を拍なはし。本居氏云「或人、  
云美濃國の俗言に、よめ入の時に智なる者の、婦  
翁の許に始てゆくを、字茶下と云と云り。字多宜の  
古言の遺れる也。字多宜は拍上の切まりたる名也。  
日代官段に「新室樂」顯宗紀に「手掌摺亮拍上賜。吾常世等」竹取物語  
に「三日うちあげあそぶ」空穂藤原君に「すべて七日  
七夜とよのあかりしてうちあげあそぶ」菜花見はて

ぬ夢「酒をのみのゝじり、打あげのゝじる」又同淺綠に「三日のほどよろづの殿ばら參りまうで、打あげ遊び給ふ」又同本の事に「三日のほどでたく打あげ遊びて過ぬ」宇治拾遺に「酒まるらせあそぶありさま云云。打あげたる拍子のよげに聞えければ、さもあれたら走り出て儻てんなどあり」と云り。今

俗に、物の賣買又事の落着せし時に、互に手を拍わざするも、右の遺風なるべし。

○うづあめ 「うづまく」を見よ。

○うつくし うるはし 雅言には愛妹善友など愛うつくしむかたに多くいへれば、美麗なる

方に云は俗意かと思へど、字鏡に「娃於佳反。美女貌。字豆久志乎美奈」又「覩黑髮。長美。美加彌字留波志」などあり。然れば美麗の方に云も猶古言とすべし。

○うづだかし 古事記上「貴子」神代紀に「御宇宙之珍子。珍此云ニ字圖」大殿祭祝詞に「皇我宇都御子皇御孫之命」萬葉六五丁「天皇朕字頭乃御手以云云」是らたゞ字頭とのみにても、高く貴きことなるを、重ねて云るなり。徒然草上六「真乘院に盛親僧都と

て、やむ事なき智者ありけり。芋頭と云ものをこのみておほく喰けり。談義の座にても大なる鉢にうづだかうもりて、膝もとに置つゝ、くひながら文をもよみけり」(尙「うづまさ」の條を見よ)

○うつ、「ゆめ」を見よ。

○うつはもの 「つはもの」を見よ。

○うつぶし 古今、俳諧「世をいとひ木の下ごとにたちよりて、うつぶしそめのあさのきぬなり」落窪一之上「うつぶしながら見たまへば云々」うつぶしは神代紀に「全剝」と有。全とおなじくて、其まゝにふすをいふならん歟。

○うづまく うづあめ 溶巻也。六帖三「君こすばたれにか見せんしら川のせゝにうづまく瀧の

しらいと」又同「としをへて袖ひづ川のうづまきに戀しき人のかけなかりけり」後撰雜三「たきつせのうづまきごとにとめくれどなほたづねくる世のうきめかな」拾遺雜上「川の瀧にうづまくみれば玉もかもちりみだれたる川のふねかも」頬基朝臣集「もみぢばのながれうづまく淵をこそく行秋のかたみとはみめ」又今世にうづ飴と云ありて、則飴賣家の看

板、又袋のしるし等に螺旋紋。如此記せるも、水の渦巻より出たるか。これらのうづも本は上に出せしうづまさのうづと同語なるべし。

○うづまる うづだかし 雄略紀十五年「秦民分散。臣連等各隨欲驅使。勿委秦造。由是秦造酒甚以爲憂。而仕於天皇。天皇愛寵之。詔聚秦民。賜於秦酒公。公俗領率百八十種勝部奉獻庸利麻佐。皆盈穀之說也。」とあり。これに因ば、うづまるはうづもりまさの略也。うづは貴王、貴手、貴高など云と合するに、高く積り累る意にて、今俗に云も猶同意也。猶上に出せしうづむし、うづくまる等も合せ考へてよ。

○うづら／＼ 今俗に云所は、夢ごゝちなるやうの意をもいひ、又心にもいれずものするをもいふは、變轉せし也。古書にいへるは、さだかに現なるを云て、今俗にあり／＼と目に見るをいへり。萬葉二十に「なでしこが花とりもちてうづら／＼見まくのほしき君にあるかな」土佐日記に「めもうづら／＼鏡に神の心をこそは見つれ」とあるたぐひ也。

○うづらがり とりうち 夫木十四秋、信實朝臣「うづらかる秋のくさねの梓弓はやどりうちの名こそしるけれ」

○うで 腕を今もうでといふ。倭名抄に「腕字四季談四月「うでをひしがれ身をあやぶむ」今昔物語中にいく所も見ゆ。猶下加部かひなの所見合すべし。」

○うてな 新撰字鏡下「曉樹、高屋也。无壁之屋也。高宇氏奈」と有。臺字をよむもこれに同じ。夫木十三秋、前中納言定嗣卿「蟬のこゑむしのうらみぞきこえける松のうて、なの秋の夕ぐれ」

○うてる 一物にけおされたるをうてたと云是也。伊勢集に「ふけし夜の行あひの霜にうてしかどなど身にさむくあたらざりけん」こは冰を輕して云る歟年中行事歌合、相撲「夕顔にあふひの花のさしあひていづれか色のうてんとすらん」こは今云ともはら同じ。但し雅言の方にては、るとはいひがたき語なるべし。

○うど 「あきうど」「じちうど」など云うど也。人と云べきを音便の轉語也。和名抄云「商人。穀梁傳

云。商人和名、阿岐比止。一云。商買。一云。百族。和名毛

「夜加良」とあり。また辨色立成云「市郭兒。和名伊知比止。一云。市人」とあり。此外落人、仲人、旅人、狩人、田舍人の類多かり。

○うとまじ 疎きより出て、惡む方にもうつれるなるべし。源氏桐壺に「なぐさむやと、さるべき人々を參らせ給へど、なすらひにおばさるゝだに、いとかたき世かなとうとまじうのみよろづにおぼしなりぬるに」

竹取物語「くらもちの御子は、うどんぐゑの花の枝持てのぱり給へりとのゝしりけり」翻譯名義集云「優曇鉢羅。此云瑞應。般泥洹經云『閻浮提内有尊樹王。名優曇鉢。有實無華。優曇鉢樹有金葉者。世乃有佛』」

○うながす 夫木舟六、雜、信實「たなばしにかつぐ駒をうながしてうひくしくもいづるたびかな」宇治拾遺に「道遠し馬うながしてゆけといひく」

○うなだる 拾遺集雜夏、贈皇后宮「しばしだにかげにかくれぬときはなほうなだれぬべきなでし

この花

「ばんのこ」を見よ。

○うなじ 頗政集「秋かせの身にしむ事をそよくとうなづく萩ぞもろこゝろなる」

○うなる 「うゝ」を見よ。

○うのまねする鳥は水をのむ 堀國雜記云「上野國鳥川にて「とりもえぬいをのこゝろもはぢもせずのまねしたるからす川哉」夫木廿七雜、權信正公朝「おほる川ゐくひにきゐる山鳥うのまねすともうをはとらじな」

○うば 祖母また山嫗などやうに、老婆をもいひ、乳母をもいふ。隆信集に「うばにて侍し人みまかりて云々。はゝのかのぶくきられし日」しのびね上「わか君はうばきみにいとよくなつき給ひて」同「うば上も云々」是らは異本堤中納言物語に「うばにて侍る人わかくて」これは祖母か、乳母「うば君いかにかたはらいたく云々」著聞集五「もる山のいちこさかしくなりにけり時政うばらがいかにうれしかるらん」是なり。曾禰好忠集、十二月終「としふればうばの玉裳もおいにけりからずのかみに雪つもりつゝ」是は老婆をいふ

夫木舟五難、西行上人「いちこもるうばめおうなのか  
さねもつこのてがしはにおもてならべむ」（猶「めの  
と」を参照せよ）

○うはき　　「うはのそら」を見よ。

○うはぎ　　金葉冬、前齋院六條「なか／＼に霜  
のうはぎをかさねてやをしの毛衣さえわたらん」  
堀川院百首、公實「しめのうちに八重さく菊の朝毎  
に露こそ花のうはぎなりけれ」此外にも同百首中に  
「表着」とよみたるうた四五首みゆ。

○うはしき　　上敷也。藤原清正集に「こと人の  
くらのうはしきに云々」今昔物語十七に「うはしき  
のむしろの上にちらしおきけるに」

○うはぞめ　　表染也。藤原爲忠集「くれなゐに  
うはぞめしたる梅の花あめふりそむる色とこそみ  
れ」

○うはなりうち　　女の嫉妬によりて、又の女を  
打を、うはなりうちと云。此は昔は、今のやうに嫡  
妻妾とはわかつて、只何となく二人の妻を持人あり  
き。もとよりなるをこなみといひ、後にいれたるを  
うはなりと云つれば、其こなみが妬がりて、後妻を

打事の多かりしよりいひをめたる詞。さて然か詞  
となりたるうへは、必しも前妻、後妻の争ひのみな  
らず、女の妬て女を打を、凡てうはなりうちといひ  
ならへり。近比の狂言綺語の中にも、此詞多く見え  
たる皆しかり。寶物集二、怨憎會苦條云「村上帝の宣  
耀殿の女御芳子と、小一條左大臣の女御と、打たは  
れておはしますを、覗て御覽じけるが、あまり妬く  
思しけるほどに、九條右大臣師輔の女御を、土器の  
破にて打給ひけるとぞ聞えし。さて御兄の殿原一條  
殿伊尹、堀川殿兼通、三條殿兼家三人ながら御かこ  
しまりになり給ひけりとこそは聞しか。増てあやし  
の下子どもの後妻打とかやをして、髪をかなぐり、  
とりくみ、引くみするは、ことわりにぞ侍るべ  
き」と見えたり。此外物語書などにも多きことなり。

さて此前妻、後妻の事和名抄の釋によりて、心得あ  
やまれる人多し。古事記中、神武天皇大御歌の御詞  
にも出たるを、傳註に解る旨も、同じく心得あやま  
れり。そのよし蘆荻抄に委しく弁へおけり。

○うはのそら　　うはき　　藤原高光集「たつき

じのうはの空なる心にものがれがたきはこの世なりけり」堀川百首、國信「春ごとにうはの空なるこゝろもてものわせせせずかへるかりがね」散木集「おしなべてこたへぬ山の山彦をうはの空にもよぶことりかな」金槐集「こむとしもたのめぬうはの空にだに秋風ふけば雁は來にけり」こは歌につね多くよむことなれど、今の平言にも云こと故に出しつ。浮氣といふも此うはなり。

○うはゝみ 「くちなは」を見よ。

○うばふ 金葉集夏、春宮大夫公質「雪の色をうばひて喚る卯の花にをのゝさと人冬ごもりすな」

○うはぶき 林葉集、藤原良清「舟とむるとしまがいその山おろしらるもみち葉や笠のうはぶき」夫木十八冬、寂蓮法師「さびしさはかさねてけりなつのくにのあしのまろやの雪のうはぶき」又同爲家「かきくらすそらさへひまはなかりけりなにはのこやの雪のうはぶき」(猶「やのむね」を參照せよ)

○うはまいとり くちまい 口錢 上分米

類聚名物考云『住吉記考云「住吉上分米と云事は、往古住吉神領の内は申に及ばず、船路歩路によらず、

諸國の年貢の上分米を當社へ調進せしと也云云。されば源平の比はひ、住吉神主長盛へ、八幡の檢校より上分米調進せし支證等、今現にあり」と見ゆ』といへり。今按に、此上分米と云は、運上米と云が如くにて、俗に上米取と云は、是より出たり。そはたとへば百石積たる舟ならば壹石とり、三俵つける駄ならば壹升貳合とするといふほどにて、その量に隨て歩米をとりし也。大かたは其上口をとる故に、是を口米とも云。後には錢を以て出すことありしより、口錢とりといふ名も残りしなり。

○うばら 「せきぞろ」を見よ。

○うひ某 今の世にも「うひくし」「うひ奉公」「うひ産」などいふ。伊勢物語に「うひ冠」源氏、初子に「いわけなきうひ琴ならふ人もあるを」菜花、初花に「二月に春日の使に立給ふ。殿のはじめたるうひことにおばされて」金葉雜上『源仲正が娘、皇后宮に始て參りたりけるに、琴ひくと聞せ給ひて云々』美濃「うれしくも秋のみやまの松風にうひ琴の音のかよひけるかな」狹衣一八丁「うひくしげにとりなして」夫木二春、仲正「うひ立にける霞

かな」又惠慶「うひたつ霞」

○うひやつ 「いしく」を見よ。

○うぶすな 縣居雜錄云『推古紀二十 大臣奏曰

「葛城縣者元臣之本居也』是をウブスナと傍訓せり。

後世の俗説なるべけれど、猶古語かもしらねは引り。

生産の時、其氏神の社の土をとりて、產屋に散らす

ことあり。かの梅宮より奉る砂是也。其を本にて、

先祖より生れし地をも、我生れし所をもいへり』已上 雜錄

とあり今按に、續後紀三十六曰「六月大和國外從五位

下伴宿禰是等廿五人。改ニ本居貫附左京」とも見ゆ。

今俗に產神を呼は、本居神と云を略云歟。猶此稱も

久しきこと也。今昔物語卅二丁に「形チアリサマ、失

ニシ向腹ノ姫ギミニハ勝レナ有ケル。其ガ七條

邊ニテ生レタリケンバ、產神ニ御ストテ、二月初午

ノ日稻荷ニ參ラムトテ、大和ヨリ京ニボリテ云々」

壇壝抄八二十一云「當時者所生ノ神ヲ云カ。或ハ本居

ト書、或ハ產所ト書、又宇夫須那共書ナリ」風土記

云「尾州葉栗郡宇夫須那社アリ。廬入姫ノ產屋ノ地

也。故有此號ト云。廬入姫ハ景行天皇ノ御宇人也。又強神ノ心ナケレモ所生ウブスナト云也。日本紀

ニヘ本居ト書ヲウブスナト讀也。本アリシ所ヲ云義

也云云」と見ゆ。さて產屋に砂をまく事は、下に引

梅宮社記に見えたリ。

○うぶやにすなをちらす

梅宮社記云「抑當社

明神者。人皇五十二代嵯峨帝后檀林皇廟也。當時嵯

峨帝甚志常以黎民如子也。故天下飯之如望市

之賣國中服之似水流下也。雖然帝以無太子誕

生而妻々不樂。因茲被祈上下神祇之中被祭

木花開耶妃也。一夜三更之比忽有一了鬟小女而

枕上。帝問汝是誰之女子耶。對云。妾是大山祇之神

兒木花開耶姫也。神代昔一夜有身。遂生四柱口而無

恙汝頼我尤切也。不日可有懷胎爲妃造產屋以

待之。語畢夢覺。厥後檀林皇已有娠。于時皇后云。吾

當產之時室敷清砂。其後產月既滿而所乞敷清砂

也。皇后其上生兒端坐矣。帝抱欣喜無限。依斯

今民家欲產者當社砂敷產婦之下者。蓋此神遺法也

云云」と見ゆ。今按に、敷清砂事此時が起りには

あらで、木花開耶姫命の無戸室の遺風なるべし。

○うへさま あにご おとうとご 上様也。

さんごくしざいにもおこなはれなん云云「めのと同じ處に「あにごはむかひの山を見てさのみなかせ給ふぞや云々」と見えた。既く此ほどより見えた。又あにご、おとうとごなど云ことも、これかれ見えた。上の阿部に出せしあねごと云と合すれば、子の御歎。御には有べからず。

○うへみぬわし 新六帖二、信實朝臣「またはうもはねをならぶる鳥もあらじうへ見ぬわしの空のかよひぢ」

○うまのたてがみ 稲政集「落かゝるなみだやしげき懸路ゆく駒のたつ髪露ふしにけり」

○うまをうしにかふる 事林廣記云「得ニ一牛、遇ニ一馬」とある類也。又うしを馬にのりかへたと云謡もあり。

○うみおとす 空穂、俊蔭「玉ひかりかゝりやくをのこをうみつ。うまれおつるすなはち、おんなおのがぬの、ふところにいだきて」

○うみつくる 空穂、藤原君丁に「兵衛うちわらひてかばかりにおやうみつくらん人のやうにもこそ」

○うみべた 古事記上「うみべたのなぎさ」萬葉十二廿「近江の海べたは人しる」古今集「母をうみべたに見るめすくなし」

○うむ 「う」を見よ。

○うめく 「う」を見よ。

○うめげしょよう 「ひたひのはながた」を見よ。

○うめとい へば睡がたまる

首櫻巖經云「阿難譬如<sup>ス</sup>有<sup>レ</sup>人談説醉梅。口中水出。思蹋<sup>ニ</sup>懸崖<sup>ニ</sup>足心酸澁」

○うもじ 「ともじ」を見よ。

○うやなや 家内中よくうやなやにてくらすなど云ことあり。拾玉集一百首述懷「さぞといはゞまことにさぞとあどうちてなやうやといふ人だにもなし」

○うらいた 夫木十三秋、花山院御製「我やどの軒のうら板敷見えてくまなくてらす秋のよの月」

○うらがき 裏書也。十六夜日記に「のこるよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに大鏡裏書。東鑑廿九「但見<sup>ニ</sup>古陰書<sup>クラクギキ</sup>」。康秀者元慶三年任<sup>ニ</sup>縫殿助歎」とあり。古く注又心覺の事共を、枚の裏に記し

置<sup>キ</sup>を云。

○うりかひ 賣買也。忠峯集四丁「かひの國へま

かり申とて「君がためいのちかひにぞわれはゆくつ  
るてふこほり千代をうるなり」

○うヶのつるになすびはならぬ 桃無李實

注云「俗諺曰。種<sup>シ</sup>李不<sup>シ</sup>成<sup>シ</sup>桃。種<sup>シ</sup>禾不<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>豆」

○うりをこはうつはものをまうけよ 道長公傳云

「うりをこはうつはものをまうけよと申事あり」

○うるさし うるせし 後撰集十八雜四「つ

ねに來とてうるさがりてかくられければ、遣はしける  
云云」大和物語廿七段に「おやのもとにきぬをなん  
あらひにおこせたりける中略法師になりぬる人はか  
くうるさき事をいふものかといひければ云々」これ  
らは今俗に云と同じ意ときこゆ。又伊勢物語に「む  
さしあふみさすがにかけておもふにはとはぬもつら  
しとふもうるさし」紫式部集「近江守のむすめにけ  
さうすときく人の、ふかき心なしなどつねにいひわ  
たりければうるさくて」堀川百首、顯仲朝臣「柴の

やのはひりの庭におくかひの烟りうるさき夏の夕ぐ

れ」是らは煩はらしき意也。又枕冊子一二十「たゞこ

とにうるさく思ひよりて侍りつかし」是は后宮の清

少納言をほめ給ふ處に云り。春曙抄に「うるはしくな

り」とあり。源語中にも此心にいへる所あり。可考

合。又此同じ心をうるせしとも云り。空穗、後蔭「い

とうるせかりしものゝ、かへりまうできたれること

へよろこびて」今昔廿三、駿河云云條に「ウルセキ  
奴<sup>ノ</sup>カシ」字治拾二「うるせきやつぞかし」又云

「わらべなれどもかしこくうるせきものは云々」など

ある、是らの上下の續き、皆めでうづくしむかゝり

の處に云り。今なか人の言を聞あつむるに、世間

にうるさきといふ所をうるせきといへる國もあれ

ど、下總國の葛飾郡北、今新武藏と云あたりにては、

上方の人いうい奴<sup>ノ</sup>ちやと云處を、うるせい奴<sup>ノ</sup>ちやと  
云へり。此語本は愛狹<sup>エツキ</sup>にて、心にひまなく愛うつく

しまるゝ意のいろいろに轉用せしなるべし。

○うるせし 「うるさし」を見よ。

○うるこぐも みづまさぐも タベの空に白

雲のさ「波の如く、又いろこの如く棚引ことあり。

俗に是をいはし雲ともうろこ雲とも云。此雲だつ時は三四日の内に大雨ふることのある故に、うたに水まさ雲とよめり。又陸羽が茶經に、茶を煮處に「又如晴天爽朗有浮雲鱗然其沫者若綠錢浮於水上」と見えたり。淮南子六、覽冥訓「山雲草莽、水雲魚鱗。旱雲煙火。浮雲波水。各像其形類。所以感之」注「山中氣出雲似草莽。水氣出雲似魚鱗。旱元陽氣似煙火。浮流水也。雲出於浮似波水。」此事既に伊部いはし雲條に出。合せ見るべし。

○うゑき 万葉三二十に「市植木乃木たるまで」九十二十九(二十一十五等)にも出。これらは植りてある木を云て、今世に云とは異なれど、ゑき木にするよしに云なれば、それも終に同じことに落ぬべし。後撰雜三に「前栽のなかにすの木のおひて侍ときて、ゆきあきらのみこのもとより、一本こひにつかはしたりければ、くはへてつかはしける、眞延法師「風霜に色も心もかはらねばあるじにたるうゑき木なりけり」かへし、行明のみこ「山ふかみあるじにたるうゑき木をば見えぬ色とぞいふべかりける」こ

れらは今云にや、似たり。

○うゑくねこにあづくる 史記刺客傳云「是謂委肉當餓虎之蹊。禍必不振矣」

其一は、事の多端にして、其處に用なき事を略て云云と云。此間の言には、しかゞとも、なにくと云も云にあたる。今一つは、上を受てなにくと云云と云處におく、中昔後の文中に多し。漢籍にも多し。

古き物にていは、前漢書、金日磾傳「教當云云」註、師古曰「云云多言也。」同五汲黯傳「上方招文學儒者。上曰吾欲云云」註師古曰「云云猶言如此如彼也。史略云其辭也。」後漢書卅九仲長統傳「或曰善爲政者欲除煩去苛。并官省職爲之以無爲。事之以無事。何子之言云云也。」文選、註、張銳云「謂之辭多略而不能載也。」

○うんでい 雲泥のたがひなど云是也。白氏文集卅四「鵬背負天龜曳尾。不可得同遊」引書に雲泥の文字なき誤脱なるべし。

○うんのきはまり 後漢書六十八宦者列傳「竇武何進。位崇威近乘。九服之驅怨。協群英之勢力。而

以三凝留不斷。至於殄敗。斯亦運之極乎」

○うんのつか

運盡也。

文選、

豪士賦序

陸士衡

「是以事窮運盡。必於頗仆」

○うんめい

文選運命論

李蕭遠

註、

李善曰、「運、  
謂五德更運。帝王所稟以生也」春秋命苞曰「五德

之運。各象其類。興亡之名應錄。以次相代」宋均曰  
「運錄運也。春秋之命苞曰「命者天下之令也」